



日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.22 2023年5月25日発行

■ 理事長挨拶

帖佐 悦男



会員の皆様におかれましては、日頃よりスポーツ医学に関する教育・研究・臨床の推進ならびにこれまでの日本整形外科スポーツ医学会 (JOSSM: The Japanese Orthopaedic Society for Sports Medicine、整スポ) の運営にご尽力いただき、心から感謝申し上げます。

私自身、会員そして評議員にさせていただき、高岸憲二理事長、松本秀男理事長のもとで、理事、副理事長を務めさせていただき、多くのことを学ばせていただきましたので、我が国におけるスポーツ整形外科の歴史を振り返りますことで挨拶とさせていただきます。

この度、日本スポーツ整形外科学会 (JSOA: Japan Sports Orthopaedic Association) の設立、誠にありがとうございます。あらためまして、設立にあたりお忙しい中、定款の作成など検討されました関係各位に深謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症も2023年5月の連休明けの5月8日から「5類」に引き下げの方針が決定されました。「With コロナ」はしばらくは続くと思いますが、日本スポーツ整形外科学会も新たな環境下で設立され、2023年6月29日から7月1日まで安達伸生会長のもと広島市で新学術集会が開催されることになっています。会員一同現地でお会いできることを大変楽しみにしております。

さて、新学会の設立にあたりまして、日本でのスポーツと整形外科医のこれまでの関わりを振り返りたいと思います。

1964年に開催されました東京オリンピック、その

後のジョギングブームも加わりスポーツ外傷・障害への関心が一層高まりました。このような背景のもとでスポーツ損傷の対策に関心がありました整形外科医が集まり、1975年5月に整形外科スポーツ医学研究会が発足しました。世界に目を向けますと、1972年に米国でAOSSM (The American Orthopaedic Society for Sports Medicine)、その後我が国のJOSSMや韓国のKOSSM (Korean Orthopaedic Society for Sports Medicine) が設立されました。これまでの整スポの歴史を表に示します。学会としては、整形外科スポーツ医学会誌の発行、学術集会の開催、日整会の認定スポーツ医に関し、日整会と連携しスポーツ医学の発展やスポーツ外傷・障害対策やアキレス腱断裂診療ガイドライン策定委員会への参加などを行いました。国際活動としては、関連団体でありますAOSSMとの合同 Meeting や Traveling Fellow と KOSSM との合同開催、GOTS (Gesellschaft für Orthopädisch Traumatologische Sportsmedizin) との traveling fellow を中心に実施してきました。社会貢献として、代表的疾患のスポーツ損傷パンフレットの作成や大学生・高校生さらには市民向けのスポーツ医学セミナーを実施し、2011年には一般社団法人となりより一層スポーツ医学の発展や社会貢献に努めてまいりました。また、事務局のご尽力もあり他学会に先駆けて会員専用マイページ、学会誌の電子化など会員にとって、より利便性の高いシステムを構築してきました。

整スポの学術集会は、スポーツ医科学の中でも特に運動器(整形外科)スポーツ医学を専門とされているメディカルスタッフを含めた様々な分野の方々が日本全国から一堂に会し、基礎的なことから臨床に至る最新の話題やスポーツ外傷・障害の予防・治療法などを議論したり親睦を深める場となりました。

表 JOSSM の歴史と JSOA 設立

1972年	AOSSM 設立
1975年5月	整形外科スポーツ医学研究会 発足
1981年	整形外科スポーツ医学会誌
1982年	整形外科スポーツ医学会誌 Vol.1 第7回
1986年	日整会 認定スポーツ医：日整会と連携しスポーツ医学の発展、スポーツ外傷・障害対策に貢献
1987年	日本整形外科スポーツ医学会 (JOSSM：The Japanese Orthopaedic Society for Sports Medicine、整スポ) 改称 世界各地 Orthopaedic Society for Sports Medicine 発足
1990年	KOSSM-JOSSM Combined Meeting, GOTS Traveling Fellow Vol.1-2 英語
1991年	AOSSM-JOSSM Combined Meeting
1993年	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Japanese Journal of ORTHOPAEDIC SPORTS MEDICINE
1994年	雑誌発刊 Vol.1-4
2001年	第1回 大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナー 開催
2004年	アキレス腱断裂診療ガイドライン策定委員会に参加
2006年	2007年 日本膝関節学会、日本関節鏡学会との合同開催
2008年	通常開催
2009年	日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) 発足
2011年	JOSSM 一般社団法人化
2012年	第1回 JOSSM-USA Traveling Fellowship 開始
2019年	市民・学生のためのスポーツ医学セミナー
2020-2022年	JOSKAS との合同開催
2023年	日本スポーツ整形外科学会 (JSOA：Japan Sports Orthopaedic Association) 設立

スポーツ医科学の対象は、子どもから高齢者、障害者・健常者、健康スポーツから競技スポーツまで様々です。本学会は、全てを網羅してディスカッションできることが特徴の一つです。競技力を向上させるためにも基礎体力は必要ですし、そのもとになる健全な運動器の発育は必須です。学校における運動器検診、野球検診などのスポーツ検診をはじめ高齢者のロコモ検診なども JOSSM を中心に実施してまいりました。今後、JSOA が中心となり一層推進していただくことを願っております。

さて、新学会の設立にあたりましては、2019年ごろからスポーツ医学を志す会員の負担や広報などの観点からスポーツ整形外科学の発展や普及に貢献し議論する学会は一つになるべきであるとの機運が高まってきました。そして今後の学会運営の転機となります新たなスポーツに関する学会の設立が、2020年12月16日の社員総会で承認され、その後 JOSKAS の社員総会でも承認されたのち今回の

JSOA の立ち上げにつながりました。あらためまして、設立にご尽力いただきました方々に深謝申し上げます。個人的には、学術集會に参加することでスポーツ医学に関する知識の習得はもちろん、先輩や同年代、後輩やメディカルスタッフ、さらには海外の先生方とも懇談できたことが大きな財産となりました。本当にありがとうございました。素晴らしい方々との出会いは、かけがえのない一生の宝になるばかりでなく、新たな視点を与えたり向上心を刺激するなど人間性を高めてくれます。是非、学会に入会し出合いを大切に、学術集會や様々な活動にも参加して頂ければと思います。

最後になりますが、日本スポーツ整形外科学会 (JSOA：Japan Sports Orthopaedic Association) の新たな門出を祈念し、本学会がますます整形外科スポーツ医学の発展に寄与し、ならびに会員の皆様にとり有意義な学会となりますことと、皆様のご健勝を祈念し、挨拶とさせていただきます。

■ 第48回日本整形外科スポーツ医学会学術集会報告

会長 北海道大学大学院医学研究院 整形外科学教室
岩崎 倫政



2022年6月16日から18日の3日間にわたり、札幌市の札幌コンベンションセンターにおいて第48回日本整形外科スポーツ医学会(JOSSM)学術集会を開催させていただきました。本学術集会は北海道大学大学院保健科学研究院リハビリテーション科学分野 遠山 晴一先生(北大整形外科同門)が会長の第14回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS)とJOSKAS-JOSSM 2022という形の合同開催で、第19回JOSSM-KOSSM(韓国整形外科スポーツ医学会)combined meetingも併催されました。開催準備の段階では、新型コロナウイルス感染再拡大の懸念もありましたが、当初の予定通り現地での対面形式で開催することができました(学術集会終了後に1か月のオンデマンド配信も実施)。会員の皆様のご指導の下、準備を進め、無事、本学術集会を終えることができましたことを厚く御礼申し上げます。

長期にわたる新型コロナウイルス感染拡大の影響による応募演題数減少を心配していましたが、一般演題の応募数は1,100題に達しました。最終的に、3,082名の方(医師、2,227名;メディカルスタッフ、398名;初期研修医、45名;学部学生:24名、上記以外:168名)に参加登録をいただき、そのうち2,318名

の方に現地参加していただきました。会場には熱気があふれ、各演題に対して活発な討論をしていただき、参加された皆様からも現地開催して良かったという声が多数寄せられました。新型コロナウイルス感染による診療や研究活動の制限がある中で、演題発表に繋がる成果を挙げてきた会員の皆様に心より敬意を表します。



会場となった札幌コンベンションセンター入口

JOSKAS-JOSSM 2022のテーマは、『Spread Your Wings — 飛翔 —』とさせていただきました。これは、JOSKASとJOSSMの両学会が共に発展的变化を経て、将来に向かって飛躍してほしいという思いを込めたものです。基調講演を北海道大学総長の寶金清博先生、文化講演を野球のWBC優勝「侍ジャパン」監督の栗山英樹氏にさせていただきました。特別講演は4演題、招待講演は2演題、教育研修講演は26セッションが行われ、幅広い領域に及ぶ14のシンポジウムと12のパネルディスカッションで活気あふれる討論が行われました。プログラム企画時には、残念ながら新型コロナウイルス感染の収束がまだ見通せない状況でした。そのため、海外からのゲストスピーカーの数は、例年と比較して少なくさせていただきました。しかし、Invited Lectures from ISAKOS 2023として、ISAKOS

の方(医師、2,227名;メディカルスタッフ、398名;初期研修医、45名;学部学生:24名、上記以外:168名)に参加登録をいただき、そのうち2,318名

の方に現地参加していただきました。会場には熱気があふれ、各演題に対して活発な討論をしていただき、参加された皆様からも現地開催して良かったという声が多数寄せられました。新型コロナウイルス感染による診療や研究活動の制限がある中で、演題発表に繋がる成果を挙げてきた会員の皆様に心より敬意を表します。



文化講演演者 栗山英樹氏を囲んで

2023 会長の Guillermo Arce 先生ならびに第 1 副会長の David Parker 先生に、国際招待講演として Kai-Nan An 先生に講演していただきました。また、教育研修講演として、Bruce Beynnon 先生、Timothy Hewett 先生、Guoan Li 先生、Chin-Hwa Chen 先生、Benjamin Ma 先生、Miho Tanaka 先生に講演していただき、活発な質疑応答がなされました。さらに、American Journal of Sports Medicine の Editor-in-Chief である Bruce Reider 先生には受賞講演 (Masaki Watanabe Award) をしていただきました。これらを通じて、学会としての高い国際性はアピールできたと思います。

これまで、多くの先達のご努力、ご尽力により本邦の整形外科学及び運動器科学領域におけるスポーツ医学が発展してきました。しかし、解決すべき課題も多く残されています。本学術集会在 JOSKAS-JOSSM 2022 という形で両学会の持つ特徴を基盤とした多様な観点から、これらの課題解決に向けた方向性を示せたと確信しております。同時に、次世代を担う若手整形外科医のスポーツ医学に対する興味や診療・研究への motivation を、向上させることができたのではないかと考えています。

北海道大学整形外科学教室として本学術集会は初の開催であり、教室および同門を挙げて準備に取り



会長講演

組みました。至らない点が多くあったと思いますが、会員の皆様のご協力により、無事開催することができました。この場をお借りして、JOSSM ならびに JOSKAS の会員の皆様に厚く御礼申し上げます。心残りは、スポーツイベントや会員懇親会等を、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みて行えなかったことです。これに関しては、ご理解していただければ幸いです。



JOSKAS-JOSSM 2022 閉会式後のスタッフ集合写真

■ 日本スポーツ整形外科学会 2023開催に向けて



広島大学大学院医系科学研究科 整形外科学 安達 伸生

COVID-19患者数も徐々に減少傾向になり、少しずつではありますがようやく日常が戻ってまいりました。日本整形外科スポーツ医学会 (JOSSM) 会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

今回、日本スポーツ整形外科学会 2023 を 2023 年 6 月 29 日より 7 月 1 日まで、リーガロイヤルホテル広島および広島県立総合体育館で開催いたします。広島大学整形外科学教室また同門会一同大変光栄に存じております。

本学会は今まで長年にわたり整形外科スポーツ医学分野に多大な貢献をされてきた JOSSM と日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) から発展的に再構築された新しい学会です。整形外科スポーツに関する学会の統一は長年の悲願でありました。両学会理事会、評議員会、代議員会また新学会設立準備委員会での未来に向けた真摯で積極的な議論を経て、日本スポーツ整形外科学会が誕生することになりました。多くの先生方のご協力、ご尽力の賜物であり、ここに関係の先生方に厚く感謝申し上げます。本学会の記念すべき第一回学術集會を広島の地で開催できることを改めまして光栄に存じております。

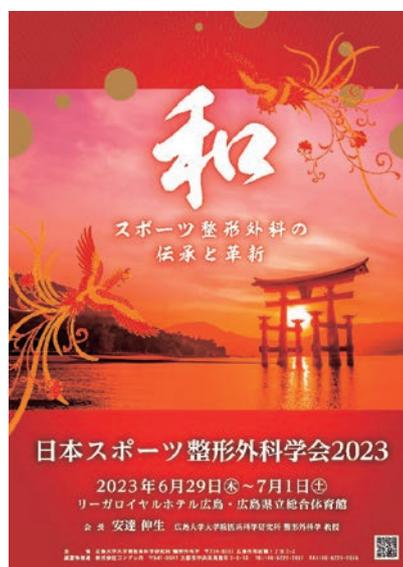
今回の学会のテーマは「和—スポーツ整形外科の伝承と革新—」と致しました。「和」には、「二つの物事が調和する」、「穏やかにまとまる」、「お互いを大切にして協力する」などいくつかの大切な意味があります。今回、我が国のスポーツ整形外科の発展を長年支えてこられた JOSSM と JOSKAS から新しい一つの学会がまさに「和」となり形作られました。お互いの学会の歴史や功績を大切に守り継承しつつも、革新にも満ちたスポーツ整形の未来が拓かれるような、そのような学術集會を目指したいと存じます。また「和」には、昨今の大変不安定な世界情勢も鑑みて、平和都市広島から世界に向けてアカデミックに発信することの願いも含まれています。

日本スポーツ整形外科学会 2023 は 3 年間の

JOSKAS・JOSSM 合同学会に引き続く学会となります、日本関節学会が新たに開催されることになり、応募演題が少なくなるのではと危惧しておりましたが、幸いにも 750 題を超える一般演題登録を頂きました。現在、実りある学会となるよう鋭意プログラムを作成中であります。森保一サッカー日本代表監督に文化講演を、デーモン閣下、原晋青山学院大学陸上競技部監督に特別講演をお願いしており、また特別企画として獣神サンダーライガー様との対談を企画しました。

最後になりますが、本学会の未来と学術集會の成功は本学会会員、特に今後の整形外科スポーツを牽引していただく若い先生方の夢と情熱に委ねられています。多くの先生方のご来広と学会参加により本学術集會が実りあるものとなるよう、ご協力のほど何卒よろしく願いいたします。

広島には大鳥居で知られる「厳島神社」と広島市の平和の象徴である「原爆ドーム」が世界遺産として登録され、多くの観光客が訪れています。また、少し足を延ばせば広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ「しまなみ海道サイクリングコース」があり、最近ではサイクリストの聖地とも呼ばれています。広島は地形的にも海の幸から山の幸に恵まれ、さまざまな料理を楽しむことができ、日本三大酒処として地酒も豊富です。皆様のお越しをお待ちしております。



■ 優秀論文賞

平成時代の大相撲力士の傷害統計

同愛記念病院 清水 禎則

このたび、栄誉ある本学会の優秀論文賞を頂戴致しました。身に余る光栄に存じます。大相撲力士の傷害調査の機会を与えて頂いた土屋正光先生をはじめ、共著者の先生方に厚く御礼申し上げます。

本論文は、同愛記念病院で長年蓄積された大相撲力士の外傷・障害データを基に、平成時代 31 年間に受診した 1,590 例 5,268 件を対象として、部位別頻度とその内訳等について調査し考察したものです。ACL 損傷など、比較的頻度の高い外傷における治療上の問題点についても言及しました。平成時代には力士の体重増加とともに怪我による休場力士

の増加がたびたび問題視されるようになったことから、必要以上の体重増加は健康面のみならず、怪我の発症・重症化の誘因になり得ることを啓発することも重要であると考えます。また、近年は土俵上での脳震盪など頭頸部外傷への対策も課題となっております。今後は微力ながら、相撲における外傷・障害予防についても取り組んでいきたいと思っております。



■ 若手奨励論文賞

各年代の野球選手における身体機能の特徴および投球肩・肘障害に関与する因子の検討

ユタ大学整形外科 理学療法士 石川 博明

この度は若手奨励論文賞を頂き、大変光栄に存じます。共著ならびに選考委員の先生方には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本論文は、「2019 年度研究助成事業」の助成を賜り、第 46 回学術集会で発表した内容を投稿したものです。この研究では、2014 年から 2019 年の過去 6 年間、野球検診に参加した述べ 2,576 名の選手のデータを後方視的に調査し、各年代の野球選手における身体機能の特徴および投球肩・肘障害に関与する因子を明らかにしました。

これまでを振り返ると、2011 年に宮城県内の公立高校に対して行った検診が、我々の活動の始まりでした。当初は、医師と理学療法士数名という少な

い人数の中、手探りの状態で行いました。その後、活動を共にするメンバーも増え、現在では NPO 法人スポーツ医科学ネットワークが中心となり、宮城県全域かつ小学生から大学生まで幅広い年代の野球選手をサポートするようになりました。本論文はこれまでの活動の集大成といえるものであり、今後も継続してスポーツ障害の予防に繋がる研究を行っていききたいと思います。



■「整形外科とスポーツ医学の今後を考える」

第3代理事長 青木 治人



本年(2023年)6月を以って日本整形外科スポーツ医学会(JOSSM)と日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS)とが合併し、新しく日本スポーツ整形外科学会として再スタートすることとなりました。

同じ整形外科を専門とするメンバーが、同じくスポーツに関連した学会を二つ持つというのは、考えて見れば不自然であった訳ですから、統合するのは当然と言えば当然のことなのでしょう。

とは言え、二つの学会が存在するようになったのは、それぞれが目指す方向性に違いがあったからなのです。

それが今回、その違いを乗り越えて“スポーツ”という両学会共通のフィールドのもとで一緒になることに決まったのですから、新しく発足する学会がその理念の実現に向けて順調に発展することを心から願っています。

その様な訳でこのニュースレターも日本整形外科スポーツ医学会として発行する最後のものとなりますので、これを機会に歴代の理事長がそれぞれどのような思いを持って本学会の運営に携わってこられたのか、その思いを文として寄せることとなった次第です。

ただ、残念なことに、初代理事長の高澤晴夫先生も第二代の井形高明先生もすでに故人となられてしまっています。結果として私が最初にこの文を寄せることになってしまいました。

私がこの分野に入り込んで以来、永い間温かいご支援とご指導を頂いた諸先輩の先生方も、その多くの方はすでに亡くなっておられます。もっといろいろとお教えておけばよかった、と今になって後悔しているところです。

整形外科の分野にスポーツ医学を取り込むことの意義を早くから認識され、研究会を立ち上げることから始めて今の学会にまで育てて来られた先生方の思いをこの私が十分に伝えられるか、正直なところとても不安な気持ちです。

しかし、与えられた責任ですので、先人たちがこの学会にどのような思いを持っておられたのか、その思いをこの学会名が“スポーツ整形外科学会”ではなく、“整形外科スポーツ医学会”になったのか、ということから読み解きたいと

思います。

当時の議論の内容やその結論が、現在の我々が見た場合、本学会としてのあるべき姿に合っているか否かは別として、少なくとも先人の思いを知っておく必要はあるでしょう。

本学会の名称が決まってきたいきさつについては名誉会員の中嶋寛之先生が以前このニュースレターに書かれています、どちらにするか色々議論があったものの、最終的には今の名称になった様です。私は、ここに先人たちの思いが込められていると考えるのです。

整形外科スポーツ医学会とスポーツ整形外科学会とどう違うのか、本学会の英文名称から考えるとわかりやすいでしょう。名称は The Japanese Orthopaedic Society for Sports Medicine です。これを文字通り解釈すれば“スポーツ医学”に関する(ことを研究する為の)“整形外科(医)の学会”であって、“スポーツ整形外科(医)”の“学会”ではない、ということでしょうか。

整形外科にとってスポーツ医学は関与すべき分野の一つですが、一方、スポーツ医学から見れば整形外科も全体を構成する分野の一つなのです。

スポーツ医学と整形外科という、両方とも幅広い分野が重なる部分、それを整形外科医の側から見て“スポーツ整形外科領域”と仮に呼ぶとしても、その様な領域だけに限るのではなく、スポーツに関わる整形外科医であるならば、多くの分野から成り立つ総合医学であるスポーツ医学全体についても学ぶべきだという、当時はその様な意図からつけた名称だったのではないかと私は考えています。また、将来的には健康スポーツや身体活動の医学的検証への取り組みをも視野に入れての意図もあったでしょう。現在の定款を見てもわかるように、活動目的自



体が発足当初のそれより広がっているのです。

本学会のニュースレター No.11 で、第 15 回の本学会の学術集会の会長をされた札幌医大の故石井清一名誉教授は、本学会発足当時のスポーツ医学の状況について、スポーツと生活習慣病との関係に関心が高まっていることにも触れておられるのです。

さらにそれに続けて、スポーツ整形外科医を目指す場合の心構えを次の様に記しておられます。まず①総合医学としてのスポーツ医学の構造と機能を正しく認識すること、②(スポーツ医学はフィールドワークが主体の実践医学であるから)積極的に現場に踏み込んで行くこと、の2点です。その上で、スポーツ医はジェネラルな知識と視野、豊かな人間性、それにオピニオンリーダーとしての気構えを持つことが大切であるとも述べられています。この文中で、先生は“スポーツ整形外科”という言葉を使っておられますが、言わんとされる意図はまさに前述の内容と同じだと考えます。

アスリートを治療するという、スポーツに対するごく典型的な関与の仕方一つとっても、選手がケガをした、その部位の治療手段にだけ長けていけば済む、という訳にはいかないのです。もちろんそれは絶対必要条件ですが、十分な条件を満たしているとは言えません。手術をするにしろ、しないにしろ(この方が圧倒的に多いのですが)、整形外科的治療

の後、スポーツ復帰に向けてどの様に選手と向き合っていくか、の方がよほど(言い過ぎだと言うならば、少なくとも“同じくらい”)重要なのです。スポーツ医学全般、そして実践の場であるスポーツ現場を知ることなく、スポーツ選手の“そのケガを治療する”だけでは不十分なのです。

かなり以前の話ですが、私はあるシリーズものの企画で、怪我や障害を経験して(それが直接の理由ではないにしろ)引退した選手とその分野に詳しい専門の整形外科の先生を交えての対談をしたことがあります。彼ら、彼女らの話しから察するに、治療に当たった医師(当然スポーツに詳しい整形外科医です)は、傷んだ組織がはっきりとわかる場合は明確に診断し、治療(手術)してくれるが、手術した後や、そもそも手術適応のない場合には、競技復帰までのリハビリテーションやトレーニングの組み立て方などが種目ごとにきめ細かくないので、その点に物足りなさを感じている、という印象を受けたことがあります。

繰り返す様ですが、整形外科医としてスポーツ選手の治療に関わるということは、その競技レベルにかかわらず、パフォーマンスを落さずに、如何に早くスポーツの現場に戻せるか、が問われるのであって、治療全体のある一段階だけを切り取って、そこだけを担当すればいい、という訳ではありません。

少なくとも選手がフィールドでの種目特異的なトレーニングを開始出来るまでの治療戦略(それらすべてに医師自身が直接手を下す訳ではないのですが)を立てるキーパーソンになること、それが、スポーツにかかわる医師に求められることだと思います。

“スポーツ”という名がつくからには、スポーツを知り、その選手を知り、その種目の特性を知り、さらにその上、関わる多くの職種の人達と良いコミュニケーションを作り上げる、という努力をしない限り、スポーツという実践の場では受け入れられません。

新しく発足する学会は「スポーツ整形外科学会」ですが、“スポーツ”あるいは“スポーツ選手”をキーワードにして、今流行りの“壁”を使って言うならば、障害部位や治療法別の壁、“スポーツ整形外科”という壁、さらには職種の壁を越えて(もちろん現場の声も聴いて)、選手がスポーツに復帰出来るまでの問題を幅広くディスカッション出来るような学会であってほしいと考えています。

最後になりますが、理事長在任中に限らず、永年ご支援頂きました諸先輩、理事、代議員、そして会員の先生方には心から感謝申し上げます。



■ 『エー私が理事長ですか！！??』

第4代理事長 藤 哲

なかざわスポーツクリニック



事務局より理事長経験者としての原稿依頼がありましたので、JOSSMとJOSKASの合併についてと幻の会となってしまった第3回日米整形外科スポーツ医学会合同会議について述べます。

このたびJOSSMとJOSKASが1本化され新生日本スポーツ整形外科学会(JSOA)としてスタートすることに対し、ご尽力された関係者の皆様に敬意を表します。このことは私の長年の願いでしたので、とても嬉しく思っています。

というのも、私が、理事の皆さんにJOSSMの理事長に推薦されたときは、表題にあるように、びっくりしたものです。この時、JOSSMからJOSKASのファンディングメンバーとなられた先生は、既に日本のいや世界のトップ・ランナーの方々でした。私と年齢も近く、常々尊敬し時々お酒を一緒に楽しんだ方々でもありました。当時のJOSSMの重鎮のお話では、『藤は膝から最も離れたところで仕事をしている。しかも弘前だ。』というのが、私に白羽の矢が立った大きな理由であったそうです。

当時、JOSKAS(日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会)に対して私が抱いていた疑問は、何でこんなに患者さんに(国民に)判りにくい学会を立ち上げたのだらう? アメリカにもヨーロッパにもないこのような学会を? でした。

特に心配したのは、スポーツを専攻する若手の先生にとっての負担増でした。この学会ができたことで、既にあった、日本臨床スポーツ医学会に加えて3つ目の学会ができ、その両立は大変な労力と時間と経済的負担であったろうと考えます。当時弘前大学整形外科ではスポーツ班のトップは藤の石橋恭之現教授でした。既に両学会にとって中心的な若手メンバーの一人として大活躍中でしたので、大変つらい立場にあったものと考えています。

その頃からいつかは一緒にならなければ、スポーツ医学をめざす若手医師に、愛想を尽かされると

思っていました。今年度から一本化されるということで、ホッと一息と言ったところです。

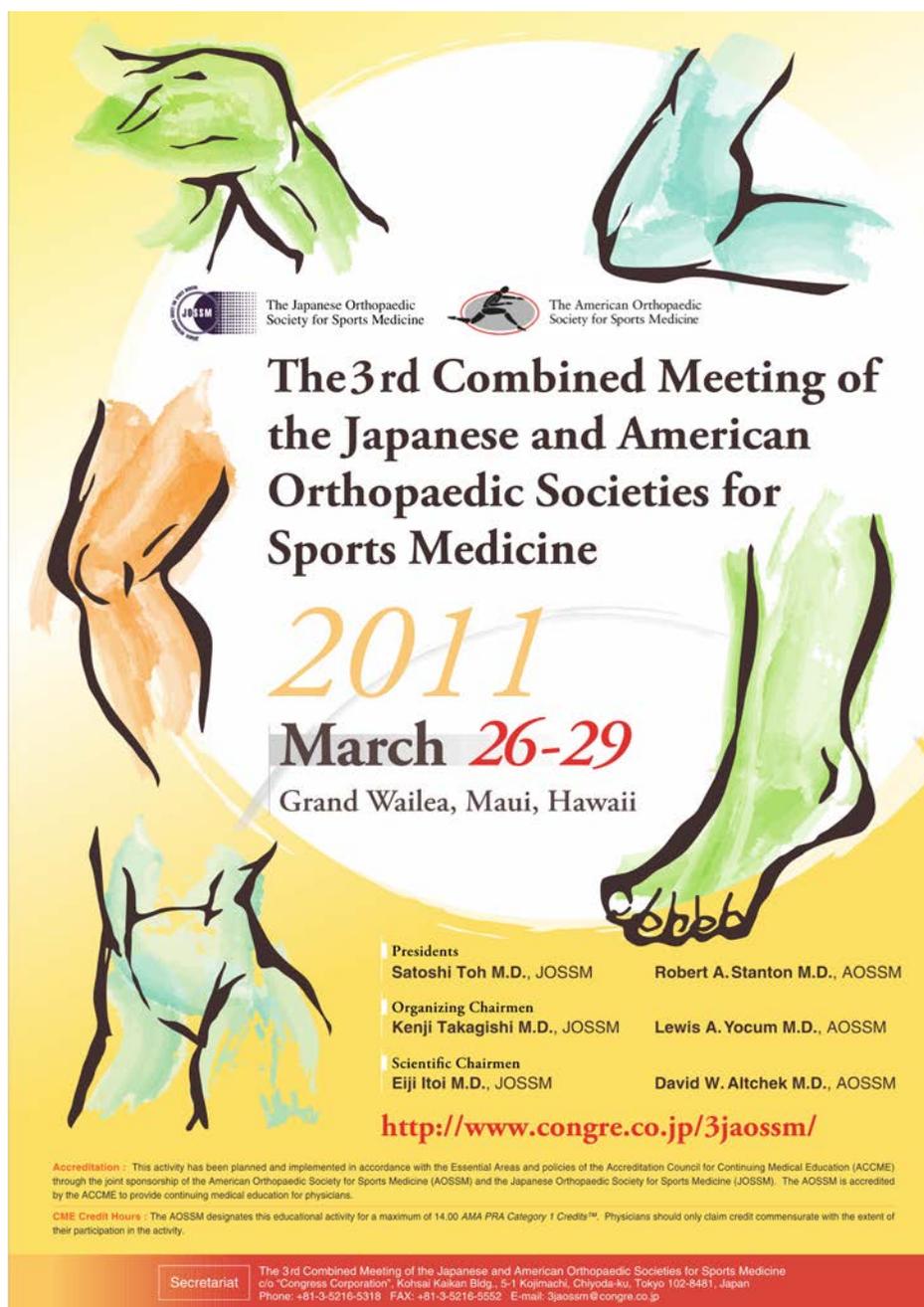
さて、私が理事長在任中に最も印象に残っていること、『東日本大地震・津波により中止となった第3回日米整形外科スポーツ医学会合同会議』について述べます。

この日米整形外科スポーツ医学会合同会議(以下合同会議)は、第1回が1991年1月22日-25日 HawaiiのKauai島で、第2回は2年後の1993年3月20日-25日 Maui島で開催されました。しかし、理由は定かではありませんがその後開催されていませんでした。その間、アメリカ整形外科スポーツ医学会(AOSSM)とJOSSMの関係をみると、各施設間であるいは会員が個人的に良好な友好関係を構築してきました。しかし、アメリカ整形外科学会(AOA)と日本整形外科学会(JOA)あるいはアメリカ手外科学会(ASSH)と日本手外科学会(JSSH)の関係のように、お互いにtravelling fellowが行き来し各National Meetingで多くの医師が参加・発表するような親密な関係を、AOSSMとJOSSM間が保持してきたとは言えませんでした。

そこで、JOSSMの理事会は第3回合同会議を開催すべく、AOSSM側と交渉を進めることを決めました。しかし、当時あまり気乗りしないアメリカ側と話をまとめるのは大変なことでした。当時の松本秀男副理事長、別府諸兄先生はじめ理事の方が、AAOSに出席しアメリカ側と粘り強いやり取りをし、あるいは日本で開催するJOSSMにAOSSMから講演者を招待し、その度にJOSSM側の意向を伝えました。

最終的に、2009年6月のAOSSMの35回学術集会(@Keystone, Colorado。会期中“熊”に注意が必要なところでした。)で両者間会談を行い、この合同会議再開についての申し合わせ事項を決めるところまで漕ぎ着けました。

申し合わせ事項としては、5年に1回くらいのペースで開催し、交互にホスト役を担当し、第3回合同会議はJOSSMがホストになることが決定されました。



津波のため幻の会となった第3回日米整形外科スポーツ合同会議

それから1年半後2011年2月には、2011年3月26-29日、HawaiiのMaui島にあるGrand Waileaにて第3回合同会議を開催すべく、全ての準備が終了していました（参考図：幻の合同会議のポスター）。

しかしご存知のように、開催2週間前の3月11日に起こった東日本大地震・大津波で中止になってしまったのです。

現在では『怪しいはやり病』のため、なかなかこ

のようなスタイルの合同会議は開催が難しいものと思います。しかしスポーツ関係で最もホットな話題である大谷翔平選手の大活躍もあり、若い先生が新しいアイデアで種々の企画を進めるいい機会ではないかと思ったりもしています。

最後になりますが、本学会の益々の発展を願っています。

記 2023年4月

■ 第5代日本整形外科学会スポーツ医学会理事長挨拶

第5代理事長 高岸 憲二



私は藤 哲先生の後を受けて2010年9月から日本整形外科学会スポーツ医学会の第5代理事長として第8期ならびに第9期を務めました。その間、副理事長として麻生邦一先生、別府諸兄先生、筒井廣明先生、松本

秀男先生、帖佐悦男先生が務められ、その他の理事及び代議員の先生方とともに本学会が大きく変動した時期に一緒にお仕事をしていただいたことに心から感謝しています。

私が理事長を務めた時代の最大の関心事はJOSKASとの関係でした。青木先生が理事長を務められた時代にJOSKASが設立され、膝関節学会と日本関節鏡学会が一緒になり、日本整形外科学会スポーツ医学会も一緒になるかどうか熱く議論されていました。青木先生の後には理事長になられた藤哲先生は『「膝という身体の一部」と『関節鏡という観察および治療手段』と『スポーツ医学』は全く異質であり、その3つが一緒になるのは国民的コンセンサスが得られない。』との意見をお持ちであった。その後、JOSKASの理事の先生から「日本整形外科学会スポーツ医学会だけでなく、日本肩関節学会も一緒にやりましょう。JOSKASSではどうですか?」とか『肩関節を専門に治療している整形外科医は肩学会があるからよいが、私達膝を専門にしている医師はJOSKASしかない。』などと言われてJOSSMがJOSKASと一緒にすることには何か釈然としなかった。理事長として本学会の基本理念である「整形外科領域におけるスポーツ医学ならびにスポーツ外傷と障害の研究の進歩・発展を目的とし、その成果がスポーツ医学の向上とスポーツの発展に寄与する」を忘れることなく学会を運営していた。

私が理事長の時代における国際委員会担当理事および副理事長を務められた別府諸兄先生の働きを忘れることはできません。まずは、アメリカ整形外科学会スポーツ医学会(AOSSM)に参加されるだけでなく、指導的立場にある先生方と懇意にされており、先代の藤理事長時代からAOSSMの指導部と粘り強く交渉されて第2回以降長く途絶えていた第3回

日米整形外科学会スポーツ医学会合同会議が、2011年3月26日から29日)にハワイマウイ島にて日米手の外科学会合同会議と同時に開催されることになりました。しかし、同年3月11日に東日本大震災が発生したため、その直後に予定されていた両合同会議は開催できず、誠に残念でした。また、別府諸兄副理事長の御尽力によりAOSSMとの間のtravelling fellow制度であるJOSSM-USAトラベリングフェローも始めることができ、スポーツ医学に興味のある若い会員がアメリカの施設を見学することができました。また、お互いの理解の行き違いによって一時途絶えていた韓国整形外科学会スポーツ医学会(KOSSM)との関係も再構築でき、毎年交互に会長ならびに会員が発表するJOSSM-KOSSM combined meetingが再開できました。ドイツGOTsとのtravelling fellowは以前同様に継続されていました。

本学会は学会発足後から任意団体でしたが、2011年12月5日付にて「一般社団法人日本整形外科学会スポーツ医学会」が設立されました。法人化には当時の帖佐悦男法人化検討委員会担当理事(現本学会理事長)がご尽力されました。法人化のメリットとしては、収益事業以外の所得に関して税制上の優遇を受けられることができ、年会費、学会誌への広告収入等の所得に関して税金を払う必要はなく、法人化したことにより企業からの寄附金、研究費等を受けやすくなりました。また、学会を法人化することにより、独自の専門医制度を持つ団体として条件の一つをクリアすることができることでした。副理事長、理事ならびに代議員などの多くの先生方のお力によって私の理事長時代には本学会はスポーツ整形外科の学会としてのidentityがより明確になったと考えています。今回のJOSKASのスポーツ部門との合併において「一般社団法人日本整形外科学会スポーツ医学会」の名称変更と一部定款の改正のみで済ませることができると伺っているので社団法人化していたことがこの点においてもよかったと思っています。

本学会が長年築き上げてきた知識の集積が今回JOSKASのスポーツ部門と一緒に新しいスポーツ整形外科の学会ができることによって更に発展することを心より期待しています。

■ JOSSM 理事長を経験して (2016年-2019年)

第6代理事長 松本 秀男

公益財団法人 日本スポーツ医学財団



2016年から4年間JOSSMの理事長を経験させていただきました。就任時に目標としたのは3つです。

第1は学会の国際化推進です。JOSSMは以前より、韓国整形外科学会(KOSSM)、更にはヨーロッパのドイツ語圏スポーツ医学会であるGOTSと深い協力関係にあり、合同シンポジウムの開催やtraveling fellowの交換などを行ってきました。この関係を更に深めることと、新たにアメリカ整形外科学会(AOSSM)との良い関係を作ることを模索しました。AOSSMは多くの国外スポーツ医学会と様々な協定を結んでいましたが、我々のtraveling fellow派遣の要請も快く受け入れて頂きました。現在、毎年3名のJOSSM-USA traveling fellowがAOSSMの学術集会の時期に派遣され、約1か月米国のスポーツ医学施設を見学することになっています。

第2はスポーツ医学の教育システムの構築です。これまでスポーツ医学の教育は大学や診療施設で個別に行われてきました。しかし、それぞれの施設で得意分野が異なり、一つの施設ですべての教育を行うのは至難の業です。更に、真の「スポーツドクター」を育てるためには、内科、リハビリテーション科等、整形外科以外の診療科を含めたスポーツや運動に関する総合的な知識や技術を教育することも必要です。そこで、学会全体として、それぞれの得意な分野の教育を施設同士が補完しながら、実施できるシステムを構築したいと思いました。施設の見

学からスポーツ医学に関する大学院での研究等まで、学会を通して、応募、受け入れの出来るシステムが来ています。

第3は現在日本にいくつかあるスポーツ医学に関する学会同士の協力です。現在、日本にはJOSSMをはじめ、JOSKAS、日本臨床スポーツ医学会(JSCSM)、更には日本体力医学会等、スポーツ医学に関連する学会がいくつかあります。それぞれの学会は理念、規模、対象や内容も異なり、それぞれの役割を担っています。しかし、シンポジウムのテーマ、講演内容など重複する部分もかなり多く認められます。海外から見ても日本におけるスポーツ医学会の在り方が複雑で見にくいことも事実です。今後スポーツ医学は益々発展し、規模が大きくなることが予想され、スポーツ選手や愛好家が安全で高いレベルのスポーツ活動を実践でき、更にすべての国民が安全で楽しいスポーツが出来るように、スポーツ医学会相互の協力を進めていく必要があると考えます。

JOSSMとJOSKASのスポーツ部門が一緒になり、日本スポーツ整形外科学会(JSOA)が出来るとのこと、大変嬉しく思っています。「スポーツ」と「整形外科」の2つのキーワードで結ばれた新しい学会に期待したいと思います。この新しい学会は、日本臨床スポーツ医学会(JSCSM)とは理念は微妙に異なりますが、その対象や内容では重なる部分もあり、今後JSOAとJSCSMの密接な協力関係を作ることも不可欠だと思います。特に、先に述べた「スポーツ医学教育」の領域では、学会相互の補完により、よい協力関係が作れるのではないかと考えます。

■ 第31回日本整形外科スポーツ医学会学術集会開催の思い出



第31回学術集会 会長 高倉 義典

奈良県立医科大学 名誉教授
西奈良中央病院 顧問

第31回日本整形外科スポーツ医学会学術集会は2005年(平成17年)7月1日および2日の二日間にわたり、奈良県新公会堂で開催しました。当時はメインテーマを決めることなく、膝や肩だけでなく足、肘、脊椎および手など広い領域でシンポジウム、パネルおよび主題の演題募集を行いました。その結果、応募演題数が160題を超え、依頼演題を合わせると200題を超えて、当時としては過去最高の演題数となりました。これは演題募集の締め切り1カ月前に、全会員に改めて演題募集中の葉書を送付しことも影響したと考えられました。

準備委員会は当時毎月スポーツジャーナルの抄読会を行っていたスポーツ医学勉強会のメンバーが中心となり、開催が決定された3年前から、毎月1回委員会を開催しました。その準備委員会は平成5年の奈良医大卒業以来、スポーツ医学に興味を持ち、スポーツ関連抄読会を始めてくれた笠次良爾先生が中心となって進めてくれました。当時、実際の運営をコンベンションの会社に見積もりを出したところ、とんでもない高額の返事が返ってきたので、委員会で話し合いの結果、会場の設営と照明だけを、公会堂常設の掛かりに依頼し、それ以外は自前で行うことに決定した。

特別講演は私の友人で米国足の外科学会の会長を前年に努めたテキサス大学のProf. Clanton およびピッツバーグ大学の基礎研究室のPro. Wooを招聘しました。会場の奈良県新公会堂のメイン会場は多くの人に知られている能楽堂で、中心の柱を1本抜いて設営しており、外国人には珍しがられました。シンポジウムは「腱・靭帯付着部症の病態と治療」、「陈旧性足関節外側靭帯損傷に対する

治療」、「投球障害肘の診断と治療」、「投球障害肩の診断治療」および「スポーツ傷害予防への取り組み」の5題を設けて、いずれも好評を博した。パネルも4題を取り上げました。また、主題の「チームドクターサポートの現状」には演題の応募が20題と集中したので、3つのセッションに分けて発表していただいた。ディベートでは「スポーツ選手における腰椎分離症に対する治療、保存or手術」ではどうなることかと懸念していましたが、座長の軽妙な司会で楽しく聞くことが出来ました。

会員懇親会は第1日目の夕方に公会堂の美しい庭園で、野外パーティーを開く予定にしていたが、天気予報では雨天が決定的であったので、予めレゼプションホールで準備をしました。当時、奈良では食事処が比較的少ないために、ここも満員の盛況でした。

期間が梅雨の真ただ中で2日間ともに生憎の雨天にみまわれ、参加者が懸念されましたが、合計で750名を超える参加者があり、これも当時では最高の入場者を記録し、成功裡に会を終えることが出来ました。

振り返って見ますと、現在の学会開催と異なり、当時は実際の会場の設営や照明以外の受付や会場の進行を、教室員が必死で開始から終了まで務めていたことが懐かしく思い出されます。一方、スポーツ医学領域においても、若い学会員の国際学会への挑戦や英語論文の作製が激減していることに懸念を抱いています。どうか頑張ってください。



図1 開会挨拶



図2 会場風景

第33回日本整形外科学会 スポーツ医学会

第33回学術集会 会長 黒澤 尚

日本整形外科学会スポーツ医学会（スポ整）が再編されるとのこと、時代の変遷と共に組織は変わって行かねばなりませんから、当然ですね。

近頃、メディアから「スポーツ選手の故障と治療や手術による復帰」が日常的に報じられますが、こ

れもスポーツに関わる整形外科医の向上、発展によるもので、それには「スポ整」が大いに寄与したものと考えますと、誠に感慨深いものがあります。更なるご発展を祈念致します。

【JOSSM 学術集会開催履歴】

開催年	学術集会				
	回	開催日	会長	所属（開催時）	会場
1975年	1	6月1日	市川 宣恭	大阪市立大学	大阪市/大阪市身体障害者スポーツセンター
1976年	2	6月6日	高澤 晴夫	横浜市立港湾病院	東京都/岸記念体育館 日本体育協会講堂
1977年	3	6月4日	市川 宣恭	大阪市立大学	大阪市/大阪市身体障害者スポーツセンター
1978年	4	4月16日	中嶋 寛之	関東労災病院	東京都/岸記念体育会内講堂
1979年	5	6月2日	秋本 毅	聖隷浜松病院	浜松市/えんてつ会館
1980年	6	6月7日	鞆田 幸徳	筑波大学	東京都/全共連ビル4階 大会議室
1981年	7	6月13日	高岸 直人	福岡大学	福岡市/(財)福岡県看護等研究研修センター
1982年	8	6月5日	城所 靖郎	城所整形外科	東京都/全共連ビル4階 大会議室
1983年	9	6月25日	渡辺 好博	山形大学	山形市/ホテルキャッスル
1984年	10	7月14日	鳥山 貞宣	日本大学	東京都/全共連ビル4階 大会議室
1985年	11	7月13日	今井 望	東海大学	東京都/東條会館ホール
1986年	12	7月3日~4日	青木 虎吉	順天堂大学	東京都/順天堂大学有山記念館講堂
1987年	13	7月10日~11日	井形 高明	徳島大学	徳島市/徳島県郷土文化会館
1988年	14	7月15日~16日	高槻 先歩	小山市民病院	東京都/京王プラザホテル
1989年	15	7月7日~8日	石井 清一	札幌医科大学	札幌市/札幌グリーンホテル
1990年	16	7月13日~14日	藤巻 悦夫	昭和大学	東京都/京王プラザホテル
1991年	17	7月19日~20日	廣畑 和志	神戸大学	神戸市/神戸国際会議場
1992年	18	5月21日~22日	東 博彦	埼玉医科大学	長野県/軽井沢プリンスホテル
1993年	19	7月22日~23日	田島 直也	宮崎医科大学	宮崎市/宮崎観光ホテル東館
1994年	20	6月16日~17日	原田 征行	弘前大学	弘前市/シティ弘前ホテル
1995年	21	6月30日~7月1日	守屋 秀繁	千葉大学	千葉市/幕張メッセ国際会議場
1996年	22	8月29日~30日	林 浩一郎	筑波大学	つくば市/ノバホール、筑波第一ホテル
1997年	23	5月15日~16日	茂手木三男	東邦大学	東京都/高輪プリンスホテル
1998年	24	9月10日~11日	赤松 功也	山梨医科大学	山梨県/八ヶ岳ロイヤルホテル
1999年	25	5月28日~29日	圓尾 宗司	兵庫医科大学	神戸市/神戸国際会議場
2000年	26	5月19日~20日	白井 康正	日本医科大学	東京都/東京国際フォーラム
2001年	27	9月13日~14日	生田 義和	広島大学	広島市/メルパルク HIROSHIMA
2002年	28	3月28日~29日	山本 博司	高知医科大学	高知市/高知新阪急ホテル
2003年	29	7月17日~18日	今給黎篤弘	東京医科大学	長野県/軽井沢プリンスホテル
2004年	30	7月2日~3日	青木 治人	聖マリアンナ医科大学	東京都/都市センターホテル
2005年	31	7月1日~2日	高倉 義典	奈良県立医科大学	奈良市/奈良県新公会堂
2006年	32	6月8日~10日	岡崎 壮之	九十九里ホーム病院	千葉県/沖繩コンベンションセンター
2007年	33	6月14日~16日	黒澤 尚	順天堂大学	札幌市/札幌コンベンションセンター
2008年	34	7月4日~5日	武藤 芳照	東京大学	東京都/都市センターホテル
2009年	35	9月25日~26日	高岸 憲二	群馬大学	前橋市/ベイシア文化ホールほか
2010年	36	9月10日~12日	別府 諸兄	聖マリアンナ医科大学	横浜市/新横浜プリンスホテル
2011年	37	9月23日~24日	岩本 幸英	九州大学	福岡市/福岡国際会議場
2012年	38	9月14日~15日	筒井 廣明	昭和大学藤が丘リハビリテーション病院	横浜市/パシフィコ横浜
2013年	39	9月13日~14日	大塚 隆信	名古屋市立大学	名古屋市/ウインクあいち
2014年	40	9月12日~14日	松本 秀男	慶應義塾大学	港区/虎ノ門ヒルズフォーラム
2015年	41	9月11日~12日	久保 俊一	京都府立医科大学	京都市/ウエスティン都ホテル京都
2016年	42	9月16日~17日	山下 敏彦	札幌医科大学	札幌市/札幌コンベンションセンター
2017年	43	9月8日~9日	帖佐 悦男	宮崎大学	宮崎市/シーガイアコンベンションセンター
2018年	44	9月7日~9日	西良 浩一	徳島大学	徳島市/アスティとくしま
2019年	45	8月30日~31日	中村 博亮	大阪市立大学	大阪市/コングレコンベンションセンター
2020年	46	12月17日~19日	石橋 恭之	弘前大学	神戸市/神戸国際会議場、神戸国際展示場
2021年	47	6月17日~19日	稲垣 克記	昭和大学	札幌市/札幌コンベンションセンター
2022年	48	6月16日~18日	岩崎 倫政	北海道大学	札幌市/札幌コンベンションセンター

■「縁と運、そして恩」



昭和 50 (1975) 年に医師となつて以来、数多くの医学系の学会・研究会に参加し、演者・座長、論文・書籍執筆、講演者等の役割りを果たしてきた。その中で、とりわけ日本整形外科スポーツ医学会への愛着は、ひときわ強く大きい。第一には、元々、医学生の頃より、将来、スポーツ医学に携わる医師としての活動をという希望を抱いて整形外科の道を選択していたこと。第二には、本学会の誕生からの歴史と、筆者の医師としての歴史が、たまたま重なっていること。第三には、本学会の様々な活動を介して、実に多くの全国のスポーツ医学の仲間や先輩・後輩、関係者らと出会い、それを契機に、面白く充実した活動を長く共にしてきたことが理由である。

筆者と本学会との個人的関係の年譜を下記に示す。

このように振り返ると、私の一人の医師及び教育・研究者としての 48 年に及ぶ活動の中で、本学会との関係が、いかに濃密で大きな役割を果たしてきたかを、改めて認識する。それと共に、本学会を通して、行動を共にし、また愉快地に食べ・飲み、語り合った数多くのスポーツ医学の仲間たちに改めて

第 34 回学術集会 会長 武藤 芳照

東京健康リハビリテーション総合研究所 所長
東京大学名誉教授

感謝したい。

「人生は縁と運、そして恩」が近年の私の座右の銘であるが、日本整形外科スポーツ医学会は、人生のたくさんの出会いの機会と場を提供してくれた。その縁と運に感謝し、その恩を胸に刻みつつ、また明日から、多くの仲間やスタッフらと共に、スポーツ医学を基盤とした健康な社会づくりに資する活動をコツコツ(骨々)と続け、前に歩みたいと思う。



図 1 初の「医学生のためのスポーツ医学セミナー」で座長を務める杉岡洋一 九州大学総長(右)と筆者

年月	内容
昭和 50 (1975) 年 6 月	第 1 回整形外科スポーツ医学研究会 (大阪)、医籍登録
昭和 51 (1976) 年 6 月	第 2 回 同 研究会 (東京)、大学院学生として、初めて研究会に参加
平成 9 (1997) 年 5 月	日本整形外科スポーツ医学会 理事に就任 (教育研修担当)
平成 11 (1999) 年 5 月	第 25 回本学会学術集会の折に、初めて「医学生のためのスポーツ医学セミナー」が開催される (神戸市)。杉岡洋一 九州大学総長と共に、講師と座長を務める (図 1)。
平成 13 (2001) 年 9 月	第 1 回「大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナー」が開催される (広島市)。以後、毎年開催の方式となる (図 2)。
平成 18 (2006) 年 6 月	理事を退任 (第 2 期～第 5 期の 3 期を務めた)。
平成 20 (2008) 年 7 月	第 34 回学術集会会長を務める。 メインテーマ「スポーツ外傷・障害のメカニズムと予防」 標語 [SWIM Congress] Scientific 学術的で Warm 温かで Interesting 面白く Memorable 心に残る (長年携わってきた水泳にちなんで)
平成 21 (2009) 年 8 月	同 学術集会の記録集として『スポーツ医学実践ナビ～スポーツ外傷・障害の予防とその対応～』(武藤芳照編著、B5 判、392 頁、日本医事新報社) 発刊 (図 3)。
平成 25 (2013) 年 6 月	学会監事に就任
平成 27 (2015) 年 6 月	監事退任。名誉会員に。
令和元 (2019) 年 8 月	第 45 回日本整形外科医スポーツ医学学会学術集会にて、特別講演「超高齢社会におけるスポーツ医学の役割」を行う。
令和 3 (2021) 年 6 月	上記講演内容を骨格として、『スポーツ医学を志す君たちへ』(武藤芳照著、四六判、291 頁、南江堂、発刊。著作 100 冊目)。



図 2 教育・啓発冊子として制作した『大学生・高校生のための現場のスポーツ医学入門』(ブックハウス・エイチディ発刊、2004 年)



図 3 第 34 回日本整形外科スポーツ医学学会学術集会の記録集としての著書『スポーツ医学実践ナビ～スポーツ外傷・障害の予防とその対応』

■ 第35回日本整形外科スポーツ医学会の思い出

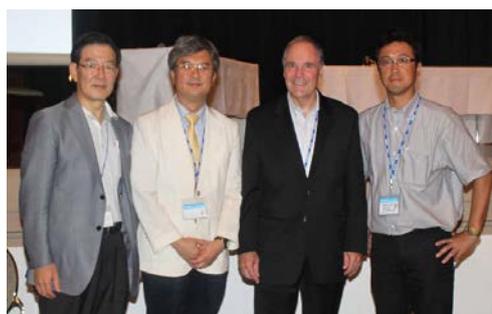


この度日本整形外科スポーツ医学会が JOSKAS のスポーツ部門と一緒に新しいスポーツ医学会ができること大変うれしく思っています。

第35回日本整形外科スポーツ医学会は平成21年

9月25、26日に前橋市にて群馬大学整形外科学教室が主催して開催しました。

当時 JOSKAS から共同開催のオファーもありましたが、以下に述べる理由で前橋市にて単独開催しました。1) 整形外科医および野球指導者に野球障害肩で苦しんでいる野球選手に対する診察方法および理学療法士の治療手技を知って欲しい。2) スーパーローテーションが開始されて以降、他地方大学と同様に群馬大学卒業生を含めて群馬県に残る医師が次第に少なくなってきたので群馬大学医学部のみならず他大学医学部の学生にもスポーツ整形外科について知って欲しい。3) 前橋市の市街地がシャッター街になるなど前橋市内の衰退を身近に感じていたので少しでも前橋市の活性化に役立ちたい、などの点です。国体と期日が重なったことや地方都市である前橋市で行うことでいったい何人の参加者があるのかと心配しましたが700名を越す参加者があった。招待講演者は Mr. Scapula として有名な Kibler 先生および韓国の Park 教授に依頼した。全員懇親会後に同じ会場で特別企画「投球障害肩—いかに診断し、いかに治療するか?」(座長菅谷啓之先生)を開催した。演者はプロ野球選手も治療されている原正文先生(久恒病院)と理学療法士(PT)および昭和大学筒井廣明先生とPTならびに招待講演者の Kibler 先生が肩痛を有する群馬県高野連所属投手3名を壇上で実際に診察していただき、PTによる実際の治療手技を見せてくれた。多くの先生から野球肩の診察方法を初めて知ったとか、投手に対する自分の診察法や治療法が大きく変わったなどとの意見をいただいた。参加した群馬県高校野球連



筆者、Park 先生、Kibler 先生、菅谷先生

第35回学術集会 会長 高岸 憲二

盟の指導者達からもスポーツ医学の重要性を認識したとの意見をいただき、夏の甲子園第95回大会で群馬県出身者主体の前橋育英高校が優勝したことに繋がったと考えている。「若手医師と医学生が語るスポーツ医学」のセッションを設け、全国の大学から医学生ならびに初期研修医がスポーツ医学関連の演題を発表した。学生時代に独自にスポーツ医学に関する勉強会を立ち上げてスポーツ整形外科を習得していく過程を発表した大阪医科大学在籍の医学生が最優秀賞を獲得した。群馬大学から発表した医学生は後に群馬大学整形外科に入局した。企画「若手医師と医学生が語るスポーツ医学」はその後の本学会で受け継がれている。その他、膝、足、肩のスポーツ関連のシンポジウムを行った。第35回日本整形外科スポーツ医学会は「企画と地域に密着する」ことが単独開催の優位性だと認識できた学会となった。



Kibler 先生の診察風景



原 正文先生の診察風景



筒井廣明先生の診察風景

長年日本整形外科スポーツ医学会が築いてきたスポーツ医学が新しいスポーツ学会により更に発展していくことを期待しています。



学会終了後開催に尽力した群馬大学整形外科学教室員ら

JOSSMの思い出と国際委員会



長年にわたり整形外科学会 スポーツ医学領域に大きな貢献をしてきました日本整形外科学会 (JOSSM) は1975年 (昭和50年) に創設され昨年で開催48回を迎えました。また、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) は2009年 (平成21年) に創設され現在まで13回開催されました。この2つの学会が発展的に再構築され、第1回日本スポーツ整形外科学会 (JSOA) (会長: 安達伸生広島大学教授) が2023年6月29日 (木) ~7月1日 (土) 広島大学で開催されます。整形外科学会 スポーツに関する学会の統一はJOSSM 高岸元理事長、松本前理事長、帖佐現理事長らの多くの先生方のご協力、ご尽力の賜物で、ここに関係の先生方に厚く感謝申し上げます。これからスポーツ整形外科を目指す若い先生方にとって、一つの学会で勉強ができることは素晴らしいことだと思います。

私は2000年にJOSSM代議員になり、当時の青木治人主任教授を通じて、日本整形外科学会 (JOSSM) から The Asian-pacific Orthopedic Society for Sports Medicine (APOSSM)/The American Orthopedic Society for Sports Medicine (AOSSM) Travelling Fellow 派遣の依頼を受け、2000年5月28日~6月23日まで27日間、大学を留守にさせていただきました。このTravelling Fellowshipは日本を含め、アジアから4名の医師が派遣され、私はNorth American Tour in 2000のGodfather (責任者) として参加することになりました。他のFellowは香港からのDr. James Lam、MalaysiaからのDr. Mohamed Razif、SingaporeからのDr. Yu Sie Wongで、5月29日にSan Franciscoで集合しました。①訪問場所はSan FranciscoのProf. Cannon 膝専門家、②Houston Texas、University Texas HoustonのProf. Clantonと Baylor Univer-

第36回学術集会 会長 別府 諸兄

聖マリアンナ医科大学名誉教授
(公財) 日本股関節研究振興財団
国際テニス連盟医科学委員

sity、Sports Medicine InstituteのDr. Lintnerです。そして、膝・肩の関節鏡の実技講習会がありました。③San Antonio、Dr. Markeyのお世話を頂き、University Texas San Antonio大学病院、US Army Institute of Surgical Researchを訪問しました。④Birmingham Alabama、Dr. AndrewとDr. Clancyのホストで、American Sports Medicine Instituteと病院を訪問しました。ここは大学ではないのですが、スポーツ整形の臨床と研究が、大変活発に情熱を持って行われていました。⑤Lexington、Dr. Ben KiblerのLexington Sports Medicine Centerでは肩のリハビリ訓練、テニス医学との関係を詳しく説明してもらいました。⑥Pittsburgh、故Prof. Freddie FuはUniversity Pittsburghの主任教授でResearch Fellowは日本から6名、ドイツ、韓国、イタリアなどから5名合計11名でした。半月板・ACLの同種移植、ロボットを用いたACL再建術、遺伝子研究など様々な研究並びに臨床が行われていました。⑦Nashville、Dr. Anderson、Dr. Spindlerはともに同じTravelling Fellowshipの経験者で、Vanderbilt大学のスポーツ整形外科を見学しました。これら7カ所の施設で必ず4人は、short lectureを30分程度行いました。最後に⑧Idaho、Sun ValleyでAOSSM学会学術集会が開催され、6月21日今回



Traveling Fellowship 担当委員長のDr. Teizと共に

の AOSSM/WPOA Travelling Fellowship について、God Father として最終報告をしました。米国スポーツの現状を知るまたとない機会を頂き感謝いたしました。

このような経験から、私は 2005 年に国際委員会委員長その後、同委員会担当理事・JOSSM 副理事長をさせていただき、AOSSM の理事と連携をとり、2012 年に JOSSM-USA Traveling Fellowship を創設しました。この Travelling Fellow の選考方法は前述の経験から考え、まず業績(学会発表、論文)で 1 次選考を行い、最終的に国際委員会で英語での自己紹介・講演(約 20 分)と質疑応答を行い選考しました。現在も同様に国際委員会で毎年 3 名募集・選考し、AOSSM Annual meeting に合わせて派遣しております。コロナ感染拡大の影響により、2020 年～2022 年は活動が止まっていましたが、今年から再開の予定です。

また、特に、記憶に残っていますのは、2011 年の第 3 回日米整形外科学会スポーツ医学会合同会議です。The 3rd Combined Meeting of the Japanese and American Orthopaedic Societies for Sports Medicine、開催日時：2011 年 3 月 26 日(土)～29 日(火)、会場：グランドワイレア(ハワイ マウイ島)※「第 5 回日米手外科学会合同会議」が同会期、同会場にて開催予定、テーマ：“Overhead Throwing”、参加者数：160 名(日本：100 名、米国：60 名を予定)

で、プログラム・抄録はすべて完成していました。

合同会議開催 15 日前の 2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分頃、東日本大震災(マグニチュード 9.0)が発生。日本国内観測史上最大規模で、1900 年以降、世界でも 4 番目の規模の地震でした。

そのため、第 3 回日米整形外科学会スポーツ合同会議・第 5 回日米手外科学会合同会議は、ともに中止となりました。このような経験は初めてで、大変緊張いたしました。

最後になりますが、私は医学生時代にテニス部に所属し、多くのことを学び、多くの友人を作り、テニスの楽しさを知りました。その後、医師として 40 歳半ばかり何か医学を通じて、テニスに恩返しができないかと、25 年以上にわたり(公財)日本テニス協会医事委員会・アンチドーピング委員会委員長として協力しました。2021 年に開催された東京オリンピック・パラリンピックではテニス競技の選手用医療統括者として貴重な経験をしました。2022 年からは国際テニス連盟(ITF) Sport Science and Medicine Commission Member として活動しています。

このように、テニスに関する活動を行う一方で、JOSSM 並びに、日本整形外科学会スポーツ医委員会、日本臨床スポーツドクター部会委員などを務めさせていただき、感謝いたします。



東京 2020 パラリンピック大会
車いすテニス優勝の国枝慎吾選手と共に

■ 第37回日本整形外科スポーツ医学会学術集会の思い出と次世代へのメッセージ



2011年9月23日(金)、24日(土)の両日、博多湾を望む福岡国際会議場(福岡市)にて第37回の本学会を開催させていただきました。

スポーツ医学においては、精密な診断、手術的治療からリハビリテーションまでを含む包括的な診療とケアが必要という思いを込め、学会のテーマを「スポーツ復帰に向けたトータル・ケア」と決めました。総演題数は231題、一般演題数は177題でした。海外招待講演者は5名、その内訳は、Dr. W. Norman Scott(米国バスケットボール・オリンピックドリームチームのチームドクター)、Dr. Anthony Miniaci(プロアメリカンフットボール、クリーブランド・ブラウンズのチームドクター)、Dr. William E. Garrett Jr.(米国サッカーオリンピックチームのチームドクター)、Dr. Marc Safran(米国における股関節鏡視下手術の第1人者)、Dr. Jeung-Tak Suh(韓国整形外科スポーツ医学会会長)という豪華なメンバーでした。イブニングセミナーは桑田真澄氏(元・巨人軍投手)の「試練が人を磨く」でした。満員の聴衆は、桑田氏の暖かい人間性と巧みな話術に魅せられ、一体感のある有意義な講演会となりました。シンポジウムは4つ(内容はトッパースリット支援から高齢者・障害者スポーツ支援まで)、パネルディスカッションは8つ(内容は手、肘、肩、股関節、腰椎、サルコペニア等)、ランチョンセミナーは6題、モーニングセミナーは2題でした。各会場はしばしば満席で立ち見が出るほどの盛況となり、急遽会場外に中継モニターを設置して対応しました。また、ハンズオンセミナーにも力点を置き、超音波3セッション(肩関節、肘関節、運動器全般)と関節鏡2セッション(肩関節、膝関節)を企画しましたが、いずれも定員オーバーとなるほど多くの参加希望がありました。初日のポスターセッション後には、座長による優秀演題の選出と、理事による投票を経て、3題のポスター演題賞を選び、閉会式にて表彰しました。また、初日の夜

第37回学術集会 会長 岩本 幸英 九州大学名誉教授

には、繁華街の中州に近い博多リバレインという会場で全員懇親会を開催し、海外招待講演者を交え、和やかに会員相互の交流を深めていただきました。会期中、秋晴れの晴天に恵まれ、参加者数は1,080名(会員485名、非会員390名、コメディカル175名他)で当時としては過去最高、盛会のうちに学会を終えることができました。当時ご参加くださった皆様に、今でも心から感謝いたしております。

次世代へのメッセージ：第37回の学会で、高名な米国のスポーツドクター達の素晴らしい講演を拝聴できたことは大変幸運でした。しかし彼らから、「米国のプロスポーツのチームドクターの中で整形外科医が占める割合は半分以下になった」と聞かされ、大変驚きました。手術で多忙な整形外科医に代わり、プライマリケア医など他科の医師がチームドクターとなり、手術が必要な時だけ整形外科に紹介するケースが増えているということでした。次世代の整形外科医が引き続きスポーツ医学の主力を担っていくためには、手術だけでなく、スポーツ外傷・障害の予防、診断、保存療法、リハビリテーションにおける理学療法士との連携等のすべてにおいて、患者さんに緊密に寄り添っていくことが大切だと思います。



■ 将来構想委員会設立から第38回学術集会開催へ



第38回学術集会会長 筒井 廣明

2007年6月、第33回日本整形外科スポーツ医学会理事会(札幌)において本学会の今後進むべき方針、将来構想についての問題提起がありました。これを受け新たに当学会のコンセプト、ビジョン、将来構想についての検討をするべきとの決議のもと将来検討委員会の設置が決まり、2007年10月に本学会の将来構想検討委員会が設立され、小生が委員長に推薦されました。

その後も将来構想委員会は将来構想委員会委員だけでなく、代議員の先生方のご意見をもとに討議が繰り返され、本学会の歩むべき道筋についての議論が繰り返されました。

様々なご意見をもとに議論した結果、本学会の将来構想の基本は、スポーツ整形外科の独自性を確立させることが重要な課題であり、学際的領域から成り立つ総合医学としての体系および、フィールドワークが主体の実践医学としての体系の確立を目指すとの答申を理事会に提出しました。

将来構想がその後も継続して討議されている最中の2012年に第38回日本整形外科スポーツ医学会学術集会をパシフィコ横浜で開催させて頂きました。

「スポーツと整形外科のCross-Link」をメインテーマとし、「スポーツ」と「整形外科」という2つのキーワードが密に繋がるためのシンポジウムやパネルディスカッション、ハンズオンセミナーなどを部位別という縦糸と競技種目別という横糸だけで織り合わせるのではなく、スポーツ整形外科医に知っていて欲しい内容としての、鏡視下手術・超音波診断のハンズオンセミナー、スポーツ現場で行われている徒手医学、バイオメカニクス、装具療法、スポーツ歯科、アスレティックトレーナーによるサポートシステムなどで色付

けしました。

こうすることで、スポーツ医学を学ぼうとする整形外科医だけでなく、スポーツに関わる多職種の医療従事者にとっても整形外科の各分野でのスポーツ医学への取り組みを理解してもらえ、整形外科医にとってもスポーツ選手の間を埋めてくれている理学療法士やアスレティックトレーナーとの連携の大切さなど、単にスポーツ整形外科に関する知識の会得だけでなく、スポーツに関わりを持っている人達との様々な形での連携を円滑に行うために必要な知識が得られる場が提供できたのではないかと思います。

本学会は「整形外科領域におけるスポーツ医学ならびにスポーツ外傷と障害の研究の進歩・発展を目的とし、その成果がスポーツ医学の向上とスポーツの発展に寄与できるよう、日夜研鑽を深めております」との理念に基づいて活動をしています。

スポーツに係わる人々の年齢やレベルの拡がりと共に、本学会の重要性は年ごとに高まっています。この度、第4回学術集会会長をされた中嶋寛之先生が本学会の名称を決定する際に提唱された「日本スポーツ整形外科学会」との名称に変わりますが、「スポーツ」と「整形外科」という2つのキーワードが密に繋がる基本理念は今後も大切にして本学会を発展させていっていただきたいと思います。



■ 第39回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を終えて



第39回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を2013年9月13日、14日の2日間にわたって、名古屋

駅前ウイंक愛知（愛知県産業労働センター）にて開催させて頂きました。全国各地から計933名もの整形外科医、理学療法士、柔道整復師、スポーツ指導者、アスレチックトレーナーなど各方面の方々に参加され、学術集会のテーマである、『予防、治療、復帰』を基軸として、これらが三位一体となったスポーツ整形外科を目指して学術的、実践的な数多くの研究成果や治療方法が発表され、活発な討議が行われました。本学術集会では 基調講演として東京大学大学院総合文化研究科・新領域創成科学研究科教授の石井直方先生による「筋肥大・筋力増強のメカニズム」の講演を皮切りにトレーニングに関するシンポジウム、ワークショップを企画し、最新の筋力トレーニングの理論と実践を学んで頂きました。

特別講演の講師として、元プロ野球投手で地元愛知県出身、元ソフトバンクホークス監督の工藤公康氏とシドニーオリンピック男子柔道の金メダリスト、元オリンピック柔道チーム監督の井上康生氏のお二人をお招きしました。また、中京大学体育学部教授の湯浅景元先生による講演とも合わせて、選手と選手をサポートするスポーツ医学の連携について知見を深めて頂きました。

シンポジウムは、日本学術会議と日本小児整形外科学会からの共同企画を含む11題を企画するとともに特別セッションとして、ビデオセッションを設け国内第一線で活躍されておられる先生からのご意見や最新の手技を学ぶ事ができました。また「学生と若手医師が語るスポーツ整形外科」では9演題の発表があり益々盛況となりました。

海外招待講演はFreddie H. Fu先生、Gilles Walch先生、Alessandro Castagna先生、そして韓国整形外科スポーツ医学会を代表してKyung Taek Kim先生とHyoung-Soo Kim先生の5名の先生をお招きしました。また教育研修講演を、善衆会病院院長の木村雅史先生とがん研有明病院整形外科部長の松本誠一先生にお願いしました。

スポンサードセミナーはモーニングセミナー4題、ランチョンセミナー8題を企画しスポーツ医学、トレーニング、スポーツ整形

外科における最新の情報を、予防、治療、復帰の観点から国内外の講師の方々から御講演頂きました。
 第39回学術集会 会長 大塚 隆信
 名古屋市立大学大学院医学研究科 名誉教授
 東海学園大学教育学部教育学科 教授

外科における最新の情報を、予防、治療、復帰の観点から国内外の講師の方々から御講演頂きました。

一般演題の応募演題の総数は204題で、この中から口演163題、ポスター31題の発表があり、シンポジウムなどとあわせて計285題の発表となりました。

またスポーツ整形外科医、コメディカルが、実際にスポーツ活動やトレーニングの実践指導ができることを目標にハンズオンセミナー、ワークショップを企画致しました。「フォームを観て直す（診て治す）治療者を目指す—投球フォームのチェックポイント—」ではBCSベースボールパフォーマンス前田 健氏、國學院大学健康体育学科の神事 務先生のご協力を得て、投球フォーム矯正のためのドリル、フォーム改善の様子を間近で観察して頂くとともに、フォーム矯正によって肩・肘へのストレスを軽減することができるのか動作解析を用いて科学的に検証しました。「トレーニングの理論と実践」では実際に参加者の皆様にも体を動かして頂き、身を持って体験して頂くことで実践的な能力の向上を目指す内容としました。初めての試みではありましたが、参加者の方々には大変なご好評を頂きました。

現在のスポーツ医学の発達は目覚ましいものがあり、科学的根拠に基づいた健康管理やトレーニング法を通して、スポーツ選手のパフォーマンス向上に貢献しています。本学術集会を通して、スポーツ外傷・障害を予防し、より高いレベルの治療と早期スポーツ復帰を可能とする整形外科スポーツ医学の発展の一助になったかと自負しております。

最後に、将来スポーツ医を目指す先生方へのアドバイスとしてスポーツ医は病院で待機して選手を治療するのではなく、自らが現場へ赴き、また自らも運動を実践することで、スポーツマインドをより深く理解し、選手の側に立って、治療に当たって欲しいと思います。そして積極的に選手や指導者、コメディカルとコンタクトを取りつつ、選手をサポートし、athlete firstを実践されることを切望します。



会長招宴において



韓国整形外科スポーツ医学会の会長、次期会長

■ 第40回JOSSM 学術集会を主催して (2014年)

第40回学術集会 会長 松本 秀男
公益財団法人 日本スポーツ医学財団



2014年に第40回JOSSM学術集会を開催させて頂きました。学術集会のテーマは「今、スポーツ医学に求められるもの—2020に向けて—」です。2020年のオリンピックが東京で開催されることが決まり、それに向けてスポーツ医学の領域では何が出来るかを確認する学術集会を目指しました。会場はその年の夏に完成したばかりの「虎ノ門ヒルズ」です。

その年にソチで冬季オリンピックが開催され、多くの学会員が選手のサポートや現地への帯同等で協力していましたので、まずそこで「スポーツ医学が出来たこと」を振り返ることと致しました。これを元にその6年後（結局は7年後になってしまいましたが…）の東京オリンピックで、我々がどのような貢献が出来るかについて、シンポジウム等で討論することにしました。「どうすればアスリートが最高の状態で6年後のオリンピックに参加できるか」という視点で、「スポーツ外傷や障害の予防しながら、パフォーマンスの向上を目指す」が大きなポイントです。そして、そこで得られた経験をどうすれば2020年以降も学校スポーツやレクリエーションスポーツ、更には高齢者の健康スポーツにも生かせるかについても、重要なポイントになります。

また、スポーツ医学の現場では知識ばかりでなく、様々な技術も必要です。急速に進歩し、スポーツ現場でも利用できる様になった超音波診断、関節外傷や障害の治療になくてはならない関節鏡視下手術などです。これらの技術習得を目的に少人数制のワークショップも企画しました。技術の普及もスポーツ医学会の大切な役割です。

更に、スポーツ医学の領域では様々な診療科の垣根を越えた横断的な知識や技術が必要です。整形外科

を研修した人がスポーツ医学を目指し、真のスポーツドクターになるためには、内科的な考え方や知識も必要です。リハビリテーション科、婦人科、小児科、脳外科等の専門外の基礎的な知識も必要になります。そこで、教育研修講演では、「整形外科医のための帯同に必要な内科的知識」等スポーツ医学の横断的な知識が勉強できるように工夫致しました。

始まる前はちょっと心配でしたが、参加者は1,000人を超え、これらのテーマについて、真新しい会場「虎ノ門ヒルズ」で、気持ちよく十分な討論が出来たと思っています。

更にこの学術集会に合わせて、韓国整形外科学会（KOSSM）と毎年交互に開催しているKOSSM-JOSSM joint meetingを開催致しました。既に第12回目になります。ヨーロッパのドイツ語圏のスポーツ医学会であるGOTSからのtravelling fellowの講演も行い、それぞれとの交流も深めました。

JOSSMは今年から形を変え、日本スポーツ整形外科学会（JSOA）が出来ると聞いています。「スポーツ」と「整形外科」の2つのキーワードで結ばれた新しい学会に期待したいと思います。日本臨床スポーツ医学会（JSCSM）とは理念は微妙に異なりますが、その対象や内容では重なる部分もあり、今後JSOAとJSCSMの密接な協力関係も作って頂けると幸いです。



日本の整形外科スポーツ医学の発展を願って



スポーツの語源はラテン語の“deportare”であり、「気晴らし」や「楽しみ」を意味します。私は高校時代からテニスを始め、1972年に京都府立医科大学に入学してからもテニス部に所属しました。「楽しみ」ばかりではありませんでしたが、テニスを通じて基本を大切にすること、技術習得のためには反復練習が重要であることを学びました。しかしながら、その当時は科学的なトレーニングという考えはほとんどありませんでした。

これに対して、1975年に整形外科スポーツ医学研究会として発足した日本整形外科スポーツ医学会は発足から50年余り、スポーツに対する科学的なサポートという大きな役割を果たしてきました。半世紀を振り返ると隔世の感があります。

1978年に卒業して所属した京都府立医科大学整形外科学教室では1984年にスポーツ専門クリニックが創設され、先人の先生方が実績を重ねてこられました。2002年から2019年までの教授在任中は、特任教授の原邦夫先生とともに関連の病院と連携を図り新しい手術手技の考案・改良に取り組みました。代表的なものとして、膝関節靭帯に対するオリジナルの手技である、後内側ポータルを用いた前内側線維束と後外側線維束を組み合わせた前十字靭帯2束再建術をあげることができます。後内側アプローチを用いるための誘導具と大腿骨骨孔作製用の誘導具を開発し、再建後外側線維束による優れた回旋制動効果を実現しました。また、移植腱の再構築過程に関する基礎的研究では、移植腱の再構築および骨孔生着に対する血流再開の重要性を明らかにしました。さらに、術後のリハビリテーション診療においては、運動生理学に基づいて全身的身体能力の回復を目指し、有酸素および無酸素運動能力における目標値を設定したりリハビリテーションプログラムを確立しました。先進的かつ系統的なリハビリテーション診療により競技への復帰期間を大幅に短縮できました。

京都は社会人、学生を問わずさまざまな年代でスポーツ活動が盛んな土地です。駅伝やマラソンなどのさまざまな競技スポーツをサポートしてきた実績があります。この実績を踏まえ、障害をもつアスリートも安心して競技を行える系統立ったサポートとその研究を行うために、2016年に京都府立医科大学大

第41回学術集会 会長 久保 俊一
京都府立医科大学 特任教授/名誉教授

学院に日本の医学部では最初となる「障がい者スポーツ」の名称をいれた「スポーツ・障がい者スポーツ医学講座」が開設され、私が教授を兼任しました。時を同じくして、私が所長を務めていた京都府心身障害者福祉センター体育館（城陽市）にパワーリフティング競技のパラリンピック競技ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設を誘致することができました。スポーツ・障がい者スポーツ医学講座と連携することで質の高い医科学的サポートを提供することが可能になり、2021年の東京パラリンピックでは複数の選手が入賞しました。行政との連携による成果でもあり、思い出深いものになっています。

私が第41回学術集会（写真）を主催致した2015年は、日本女子サッカー代表チーム（なでしこジャパン）のW杯優勝、東京オリンピック・パラリンピック開催の決定、文部科学省へのスポーツ庁設置などの事象があり、国民のスポーツへの関心が高まっていた時期でした。学術集会のテーマを「エビデンスに基づく整形外科スポーツ医学—選手、指導者、医療チームの一体化を目指して—」とし、科学的根拠によるスポーツの展開の重要性を学術集会を通じて広く広報しました。医療関係者ばかりでなく、一般市民の方々にもよく理解されたのではないかと考えています。

2023年から日本整形外科スポーツ医学会は日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会のスポーツ部門と発展的に統合され、日本スポーツ整形外科学会となります。両学会の会員にとって有益な統合なることを期待しています。今後、新しい学会が着実に発展し、世界のスポーツ整形外科学の牽引役になることを祈念しています。



第41回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（2015年）終了後の集合写真

JOSSM2016 を振り返って



第42回日本整形外科学会スポーツ医学会学術集会を、2016年9月16日～18日に札幌市のコンベンションセンターにおいて開催いたしました。札幌医科大学整形外科学教室としては、1989年に石井清一教授が第15回本学会を主催して以来、27年ぶりの開催となりました。

学術集会のテーマを、「From Rio to Tokyo: the mission of JOSSM」としました(図1)。学術集会の直前に開催されたリオデジャネイロ・オリンピックでは、内村航平選手や萩野公介選手など日本選手団が金メダル12個を獲得する活躍を見せ、2020年の東京大会に向けた機運が大いに盛り上がる中で学会開催となりました。本学術集会では、東京2020、そしてその前の平昌冬季五輪に向け、本学会とその会員に期待されていること、求められていることは何かを考え、それに対して行動を起こしていく契機とすることを目指しました。このコンセプトに基づき、「Rio2016 オリンピックにおけるメディカルサポート」「冬季オリンピックメディカルサポート(平昌に向けて)」「パラリンピックメディカルサポート」などのシンポジウムを企画し、大いに議論が交わされました。

特別企画として、「オリンピックメダリストに聞くー腰部障害との戦いー」として、長野冬季オリンピック、スピードスケート金メダリストの清水宏保選手と銅メダリストの岡崎朋美選手をゲストに迎え、腰痛をいかに克服してメダル獲得に至ったのかについて、楽しいエピソードを交えて語っていただきました(写真1)。

海外からの講演ゲストとして、AOSSM(米国整形外科学会スポーツ医学会)プレジデントのDr. Allen Anderson(Tennessee Orthopaedic Alliance)、UCSFのDr. Theodore Miclauと長尾正人先生、DISC Sports & Spine Cen-



写真1 特別企画「オリンピックメダリストに聞くー腰部障害との戦いー」
右から、岡崎朋美さん、清水宏保さん、筆者、渡辺陽子さん(司会)

第42回学術集会 会長 山下 敏彦 札幌医科大学理事・学長

terのDr. Dean Matsudaをお招きしました。

隔年で本学術集会と併催している日韓整形外科学会(第14回)を、本学術集会に先立ち8月26日に東京の駐日韓国文化院において開催しました。日韓両国から64名の参加者があり、学術的交流と親睦を深めることができました。開催にあたり多大なるご尽力をいただいた松本秀男理事長(当時)に感謝申し上げます。

当時は、数年後にCOVID-19パンデミックが発生することも、そしてそれにより東京2020が1年延期されることも、無観客試合になることも、さらには組織委員会等に様々な不祥事が起きることも、誰も予想だにせず、ただただ希望と夢を抱いていたことを感慨をもって思い出します。

当教室としては、私が教授になってからは事実上初めての全国規模の学会だったこともあり、教室員一同、緊張感をもって準備・運営に臨みましたが、結果的に、演題数340題、総参加者数1,255名という盛会に終えることができました。本学術集会の開催を通して、教室員の一体感と一定の自信が醸成され、それがその後の更に大規模な学術集会の成功に繋がったものと自負しています。

最後になりますが、本学術集会の企画・準備・運営に多大なるご支援・ご指導をいただいた、JOSSM理事会、事務局の皆様、そしてご参加いただいた全ての会員の皆様に心より感謝申し上げます。



図1 JOSSM 2016 ポスター

■ ご 挨拶



この度の日本スポーツ整形外科学会 (JSOA: Japan Sports Orthopaedic Association) の設立、誠にありがとうございます。

JSOA の設立にあたり我が国でのスポーツ整形外科として、宮崎市で開催さ

せていただきました「第43回日本整形外科スポーツ医学会」について振り返りたいと思います。

第43回日本整形外科スポーツ医学会は、平成5年(1993年)に田島直也前教授が第19回本学会を主催して以来、24年ぶりに宮崎大学医学部整形外科学教室が再び担当させていただきました。地方大学での開催ということで、教室員一同大変光栄に存じ、教室をあげて開催の準備運営にあたりました。

本会は平成29年9月8日(金)・9日(土)に宮崎市のシーガイアコンベンションセンターにおいて開催致しました。会場は、宮崎・一ツ葉海岸の豊かな景観の中に広がるリゾートコンプレックス「シーガイア」の中央に位置し、ダンロップフェニックスゴルフトーナメントや、日本ラグビープレイヤーの五郎丸選手をはじめ多くのトップアスリートが合宿したり、九州・沖縄サミットの外相会合(平成12年)、

第43回学術集会 会長 帖佐 悦男

宮崎大学医学部整形外科学 教授

先進7カ国首脳会議のG7農相会合(令和5年)の開催地でもあります。シーガイアは、英語で海を意味する「Sea」と地球を意味する「Gaia」を組み合わせた造語です。周辺には、古事記にも登場する神話が多くあります。(イザナギ、イザナミを祀る江田神社やイザナギノミコトが黄泉の国のけがれを清め、天照などの神様が生まれたみそぎ池や住吉神社の総社・元宮などがあります。)

日本整形外科スポーツ医学会(JOSSM)は、スポーツ医科学の中でも特に運動器(整形外科)スポーツ医学を専門とするメディカルスタッフを含めた様々な分野の方々が日本全国から一堂に会し、基礎的なことから臨床に至る最新の話や、スポーツ外傷・障害の予防・治療などを議論したり親睦を深める場と考えプログラムを準備しました。

スポーツ医科学の対象は、子どもから高齢者、障害者・健常者、健康スポーツから競技スポーツまで様々です。本学会は、全てを網羅してディスカッションできることが特徴の一つです。競技力を向上させるためにも基礎体力は必要ですし、そのもとになる健全な運動器の発育は必須です。学校における運動器検診や野球検診などのスポーツ検診をはじめ、高齢者のロコモ検診なども本学会が中心となり一層推進する必要があると考えました。

そのような趣旨で開催し、1229名の医師、メディカルスタッフ、学生などの皆様に参加していただき、無事盛会裏に終了することができました。改めて関係各位に感謝申し上げます。

令和5年はWBC優勝で日本中が歓喜に包まれました。平成29年当時はイングランドでのラグビーワールドカップ、リオのオリンピック・パラリンピックが日本中を感動の渦に巻き込みました。東京2020をはじめ日本で開催されるビッグイベントでより一層感動できるよう、またスポーツ医科学の分野からサポートできるように、学術集会のテーマは、“スポーツ医学イノベーション — 継承と革新 —”としました。これらのサポートによって、日本の子どもたちが世界に羽ばたいてくれることを祈念して様々なセッションを組み、ポスターもまた、世界に羽ばたく子どもたちをイメージしてデザインしました。

応募演題は、当時過去最多となる352題にのぼ

スポーツ医学イノベーション
継承と革新 RWC2019, Tokyo2020

**第43回
日本整形外科
スポーツ医学会
学術集会**

The 43rd Annual Meeting of the
Japanese Orthopaedic Society for Sports Medicine

2017年9月8日(金)・9日(土)
シーガイアコンベンションセンター(宮崎市)
会長 宮崎大学医学部整形外科 帖佐悦男
<http://www.congre.co.jp/jossm2017/>

2017年2月2日(木)~
3月23日(木)

宮崎大学医学部整形外科学教室
〒890-0017 宮崎県宮崎市東宮原1-1-1
TEL: 0985-42-0900 FAX: 0985-42-2051

事務局 株式会社コンプレックスガイア 内
〒890-0004 宮崎県宮崎市東宮原1-1-1010F
TEL: 098-716-7116 FAX: 098-716-7148
E-mail: jpossm2017@congre.co.jp

り、このうち 192 題を講演、160 題をポスター発表とさせていただきます。

プログラムとして、招待講演3題、特別講演1題、教育研修講演3題、シンポジウム40題、パネルディスカッション47題、ランチョンセミナー9題、ハンズオンセミナー2題、特別企画1題、学術プロジェクト2題、Travelling Fellow 報告2題、企画レクチャー（開業医に役立つ実践セミナー）、学生と若手医師が語るスポーツ整形外科10題とスポーツイベントなどを実施しました。

招待講演は、Dr. Daniel C. Wascher (AJSM Editor/University of New Mexico, USA)、Dr. Churl-Hong Chun (韓国整形外科スポーツ医学会 KOSSM 会長)、Dr. Vicky Tolfrey (Director ; Peter Harrison Centre for Disability Sport, England)、特別講演は、川原貴先生(元国立スポーツ科学センター センター長)、教育研修講演は、松田秀一先生(京都大学大学院医学研究院整形外科教授)、山崎正志先生(筑波大学医学 医療系整形外科学教授)、仁木久照先生(聖マリアンナ医科大学整形外科教授)から、参加者にとり有意義な講演をして頂きました。特別企画として、「オリンピックメダリストに聞く—旭化成柔道部 ケガとの闘い：過去・現在・未来—」と題しまして、アトランタオリンピックの金メダリストで、旭化成柔道部監督の中村兼三監督、リオオリンピックで活躍しました大野将平選手、羽賀龍之介選手、永瀬貴規選手をお呼びしました。日常生活やリ

オオリンピックでのエピソード、東京オリンピックに向けての課題など興味深いお話を拝聴することができました。大変示唆に富むご講演をしていただいたと懐かしく思っております。

ランチョンセミナー、シンポジウム、パネルディスカッションでは、専門分野のご高名な先生方からスポーツ医科学に関する最近のトピックスについてのご講演をしていただきました。シンポジウムやパネルディスカッションに関しては、教室員が各自の専門種目を中心に企画し、また今まで取り上げられることの少なかった種目もディスカッションできましたので、将来のメディカルサポートの発展に繋がったのではないかと考えております。改めましてご講演いただきました方々に深謝いたします。

また、学問の合間には宮崎らしい様々なスポーツアクティビティ(サーフィン、タッチフット、キャッチボール)に早朝より多くの方々にご参加下さり楽しんでいただいたと思っております。宮崎は“太陽と緑の国”、“神話の里”とも呼ばれており、シーガイア周辺のみならず西都や高千穂は「古事記」「日本書紀」に登場する天孫降臨や天岩戸開きの地でもあります。他にも宮崎には魅力的な観光地や美味しい食がたくさんございますので、学会でのご活発な討論の後には、太陽あふれる景色や食をご堪能いただけたのではないかと考えております。改めまして、多くの方々にご参加いただき感謝申し上げます。

最後に、本学術集会の開催にご協力ご支援を賜りご参加いただいた参加者、企業、関係各位、学会の運営に携わっていただきました教室・大学スタッフ、事務局運営を担当されました株式会社コングレの皆様にご心より御礼申し上げます。日本スポーツ整形外科学会(JSOA: Japan Sports Orthopaedic Association)の新たな門出を祈念し、新学会がますます整形外科スポーツ医学の発展に寄与し、ならびに会員の皆様にとり有意義な学会となりますことをご祈念申し上げます。



■ 第44回日本整形外科スポーツ医学会 JOSSM の思い出 2018年9月6日(晩餐会)、7日-9日(学術)



2018年、徳島市アスティー徳島にて、第44回日本整形外科スポーツ医学会 JOSSM を開催いたしました。学会前後、列島直撃

の台風による関空壊滅、学会前日の北海道地震など自然災害に見舞われた日本でした。改めまして、まずは、被災された皆様にお見舞い申し上げます。

海外と北海道からの多くの参加キャンセルとなった学会ですが、蓋を開けてみると、参加者総数 1242 名は、ほぼ歴代最高の参加者となりました。この紙面をお借りして皆様方に深謝いたします。



学会の前日、晩餐会を行いました。会場は大塚国際美術館、システィーナ礼拝堂にて開催しました。友人のプロ・ピアニストである瀬部妙子様とご友人



に演奏会をお願いしました。学会タイトルである“情熱と覚悟”にふさわしい、“情熱大陸”のテーマ曲で皆様をお迎えしました。徳島の食事、徳島由来のワイン、そして最高の絵画で皆様楽しんで頂きました。

さて学会は同時開催の日韓セミナーもあり、2日半の開催でした。特別企画として、女性アスリート支援、モーターコントロール、さらには五輪企画な

第44回学術集会 会長 西良 浩一 徳島大学運動機能外科学 教授

ど。パネルディスカッションは、100%を超える復帰。各部位の障害に対し、ドクター、PT、AT が共同して怪我をする前の状態以上にして復帰させるというこれまでには無い概念のパネルを行いました。これからの日本スポーツ医学の将来を担う人材の貴重なパネルになったと自負しております。

文化講演には、世界を代表するアルピニスト・野口健さんをお願いしました。ヒマラヤで大きい雪崩に遭遇し頸椎椎間板ヘルニアになり、徳島大学にて内視鏡手術を受けたお話を始め、七大陸最高峰の最年少登頂達成に至る秘話。大学時代のスポンサー集めの苦労話。などなど、大変興味深いご講演に会員全員魅入ってございました。ありがとうございました。



本学会の special guest speaker はシカゴのノースウエスタン大学整形外科で教授をお勤めの Wellington K Hsu 先生をご招待しました。Hsu 先生は、私と



同様に脊椎スポーツがご専門で全米トップの脊椎外科医です。大変素晴らしい教育講演でした。

このような素晴らしい学会を徳島大学整形外科学教室をご指名くださった、日本整形外科スポーツ医学会の皆様方に深謝申し上げます。今後、学会は JOSSM から JSOA に進化しますが、変わらぬご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



■ 第45回日本整形外科学会スポーツ医学部学術集会を振り返って



2019年8月30日、31日の2日間、第45回日本整形外科学会スポーツ医学部学術集会を主催させていただきました。

本学会は我々の教室の市川

宣恭が第1回を開催させていただいた思い入れの深い学会です。ちなみに市川は第3回の本学術集会も主催させていただいています。私はその後約40年ぶりに本学会の学術集会の開催を担当させていただきました。まず本学術集会のテーマを【原点からの飛躍と多様性への対応】とさせていただきます。【原点からの飛躍】には、我々の教室が本学会を主催させていただいたころの原点に立ち戻るという意味を、またその原点から本学会は大きく飛躍しているという意味を込めさせていただきました。加えて、スポーツ選手が、整形外科医と関わることで、その関与時点からさらに飛躍できるという期待感も込めさせていただきました。また、スポーツ整形外科学の難しさはその多様性にあります。対象となるスポーツの種類も違えば、ポジションも異なる、さらにそのレベルも異なります。さらには年齢によってもその要求は異なることとなります。このような多様性に対応することが、予防や治療を成功に導くための大きなポイントになると考えます。学術集会が乱立しているなかで、本学術集会を皆様の印象に残る会にするため、事前準備は橋本事務局長と入念に行いました。まず学術集会のはじまりは、前日の会長招宴になりますが、ユニバーサルスタジオジャパン内のパーティ会場を借り切って行いました。我々の感覚でいえば8月最後の週末は夏休み最後ということもあって（最近では夏休み期間が短縮されている由ですが）、ぜひご家族連れで来ていただきたいと思ったからです。私の思い付きで周囲の方々が大変な苦勞をされたと思いますが、当日はたくさんのお子さまにも来ていただき、半ば目的は達成できたのでは思っています。またスポーツ大会もさせていただきましたが、早朝からグリーンスタジアム堺でラグビー経験者の方に参加してもらって、タッチラグビーをさせていただきました。



第39回学術集会 会長 中村 博亮

公立大学法人大阪理事、大阪公立大学病院長
大阪公立大学整形外科教授

兵庫医科大学の吉矢教授や長崎大学の尾崎教授と一緒に走れた？ことは今でも印象深い思い出になっています。また、学術集会1日目の夜には全員懇親会を行わせていただき、串カツやた焼きなどいわゆる粉もんといわれる大阪名物と登美丘高校ダンス部OGによるバブリーダンスの催し物で学術集会の間のひと時を楽しんでいただけたのではないかと考えております。

学術集会本体以外の話が先行してしまいましたが、集会本番には、特別講演を東京健康リハビリテーション総合研究所/東京大学の武藤先生と兵庫医科大学教授の吉矢晋一先生にお願いし、それぞれ【超高齢社会におけるスポーツ医学の役割】【スポーツ医学の現場で】と題して、ご講演をいただきました。また文化講演には橋本聖子オリンピック担当大臣に「2020年オリンピック・パラリンピックがもたらすもの—スポーツを通じた人材育成と街づくり—」、特別セッションではオリンピックパラリンピック組織委員会理事の室伏広治様に「スポーツが健康維持に寄与するための条件」のご講演をいただきました。総参加者数1734人の方を暑い大阪の地にお迎えすることができ、学術集会は成功裡に終了しました。その後、年が明けてコロナ禍に見舞われたことは皆様ご存じのとおりですが、この時点では全く予想だにしない出来事でした。本学会はいったん区切りをつけ、新たな学会としてスタートする由ですが、スポーツ整形外科には多様な知識と技術が必要であることには変わりがなく、今後も本学会がスポーツ診療の中心的役割を果たされることを期待しております。学会関係者やスポーツ整形外科を目指される方のますますのご発展をお祈りし、筆をおかせていただきます。



第46回日本整形外科学会スポーツ医学会開催の思い出と新学会への期待



東京オリンピックが予定されていた記念すべき2020年に第46回日本整形外科学会スポーツ医学会を主催させていただくことが、その3年前に決まりました。またこの年から3年間、JOSSMとJOSKASの合同学会が開催されることも決まりました。しかし新型コロナウイルスパンデミックのため、私が主催した学術集会も含め、全ての合同学会は残念ながら通常開催までには至りませんでした。当初6月の札幌で予定しておりましたが(図1)、2020年12月に神戸国際会議場で規模を縮小し開催させていただきました。様々な制約がある中、学会開催にご協力頂いた皆様方に、改めて感謝したいと思います。

学会のテーマは東京オリンピックも考慮し、『2020その先へ—調和と発展—』を掲げさせて頂きました。本学会は、それぞれ2つの学会の特徴をなくさないように配慮し企画いたしました。ハイブリッド形式ではありましたが、2020年に開催された学会としては珍しく、会場には800名を超える会員の方々にお集りいただき(図2)、運動器の治療・リハビリテーション、そして予防まで、face to faceでディスカッションできたのではないかと思います。学会最終日には、肝いりで企画したJOSSMセミナーも十分な感染症対策を行って開催しました。アスリートを治療するドクター、PT、アスレチックトレーナーを対象に、ACL損傷、投

球障害、そしてグロインペインに関しその予防を中心に、実技を交えたセミナーを行いました(図3)。本学会の前日には、JOSKASとJOSSMの合同評議委員会も開催され、この後両学会は合併の方向で進めて行くことが確認されました。その後設立準備委員会が立ち上げられ、新しい運動器スポーツ医学会のあり方について、幾度となくディスカッションを繰り返して参りました。この結果JOSSMは、JOSKASのスポーツ部門と発展的に併合し、『日本スポーツ整形外科学会(JSOA)』と名称を変え、その記念すべき第1回が、安達会長のもと広島の地で開催されます。このJSOAが今後大きく発展するかどうかは、会員の先生方の情熱にかかっていると思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



図1 第46回学術集会ポスター

第46回学術集会 会長 石橋 恭之 弘前大学大学院医学研究科 整形外科

球障害、そしてグロインペインに関しその予防を中心に、実技を交えたセミナーを行いました(図3)。

本学会の前日には、JOSKASとJOSSMの合同評議委員会も開催され、この後両学会は合併の方向で進めて行くことが確認されました。その後設立準備委員会が立ち上げられ、新しい運動器スポーツ医学会のあり方について、幾度となくディスカッションを繰り返して参りました。この結果JOSSMは、JOSKASのスポーツ部門と発展的に併合し、『日本スポーツ整形外科学会(JSOA)』と名称を変え、その記念すべき第1回が、安達会長のもと広島の地で開催されます。このJSOAが今後大きく発展するかどうかは、会員の先生方の情熱にかかっていると思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



図2 会場風景



図3 JOSSMセミナー。グロインペインの予防とアスレチックリハビリテーション。

講師：仁賀定雄先生

■ JOSSM から JSOA に向けて



伝統あるの本学会の最後のニュースレターのご挨拶を私が帖佐悦男理事長よりご指名いただき大変光栄に存じます。日本整形外科学スポーツ医学会 (JOSSM) は 2023年6月1日に日本スポーツ整形外科学会 (JSOA) に

移行する予定です。会員皆様におかれましては、日々のお忙しい診療の中、本学会へのご理解と同時に本学会の成長を見守っていただき大変感謝いたします。JOSSM は、日整会と連携してスポーツ医学の発展、スポーツ外傷・障害や成長期のスポーツ障害への対策に貢献してきました。AOSSM や KOSSM 合同会議や traveling fellowship 等の国際交流や若手育成にも尽力してきました。当方が会長を行った第 47 回学術集会 (JOSKAS 合同開催出家正隆会長) では、札幌に緊急事態宣言がでているコロナ禍の猛威の中、少しでも会員の皆様との討論や交流を図るためにオンライン開催となりました。それでも多くの会員の皆様にご発表いただけたとともに歴史のバトンを繋ぐことができました。これもひとえに、会員の皆様の研究心が成し得た結果だと考えております。昨年 6 月には岩崎倫政会長のもと第 48 回学術集会が現地開催され、コロナの収束を感じました。

第 47 回学術集会 会長 稲垣 克記

昭和大学整形外科学講座 教授

本邦でも長かったコロナ禍の終息を感じます。コロナ禍というスポーツ活動、学会活動における逆風を乗り越えた今、新たなスポーツ医学会では、本学会が果たしてきた役割を引き継ぎ、メディカルスタッフをはじめとした多職種、指導者などにより一層連携することでスポーツ医学の発展につながると考えております。また、トップアスリートだけではなくスポーツ愛好家や市民、障がい者スポーツに関わる方に対し運動器を中心に関与し、トータルに評価・指導できるスポーツ医の育成にも学会全体で取り組み、スポーツドクターのみならずメディカルスタッフの育成や市民への幅広い啓発活動も必要不可欠と思います。これらに述べたことを実行するためにも、教育・研究・臨床を通して手術だけでなくスポーツ医学の最も重要な Key であるリハビリテーション及び障害予防の観点から多面的に発表および議論する場として、また会員相互の親睦のためにも学会は大変重要でありその使命もあると考えております。最後となりましたが、本学会の伝統を新学会に継承し、整形外科のスポーツ医学の発展に寄与することを願うばかりです。会員の皆様とともに今後も誠心誠意努力する所存です。どうか今後の新学会に向けて皆様のご協力、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



2021 年札幌で行われた第 13 回 JOSKAS 出家正隆-第 47 回 JOSSM 稲垣克記両会長の学術集会合同会議の様子。

COVID19 感染拡大のため、残念ながら現地での開催はかなわなかったが、ライブ配信とオンデマンド配信による開催とし学会スタッフと両校メンバーは札幌に集結した。

編集後記

日本整形外科スポーツ医学会 (JOSSM) が、JOSKAS のスポーツ医科学に関する事業と統合し、日本スポーツ整形外科学会 (JSOA) として新たな門出を迎えるとても意義深い最終号に編集後記を書かせていただきますことを大変光栄に存じます。帖佐悦男理事長、中川泰彰担当理事、広報委員の先生方、事務局はじめ関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

今回のニュースレターには、大変ご多忙の中、第3～7代の歴代理事長及び31回～48回の歴代会長の玉稿をいただきまして、広報委員長としまして心よりお礼申し上げます。お陰様で、日本整形外科スポーツ医学会の歴史を振り返りつつ、今後の方向性を指し示す羅針盤のような役割を備えた最終号に相応しい特集になったと存じます。いずれも、若い整形外科医やスポーツ選手に対しての深い愛情に溢れており、当時のご苦勞が偲ばれ、本学会の今日の発展と盛隆に大いに寄与されましたことを再認識いたしました。私は整形外科医になってから本学術集会にはほとんど参加していますので、その時々のごことを大変懐かしく思い出しながら何度も読み返し、その都度新しい発見があります。今年6月に設立される日本スポーツ整形外科学会 2023 (JSOA2023) が6月29日～7月1日に広島で安達伸生教授のもとで開催されます。新たな歴史の1ページに是非ご参加ください。

(高橋敏明)

日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター No.22 2023年5月25日発行

編集：日本整形外科スポーツ医学会広報委員会
中川泰彰 (担当理事)、高橋敏明 (委員長)
新井祐志、田崎 篤、辰村正紀、藤井康成、安田稔人

発行：一般社団法人日本整形外科スポーツ医学会
〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5
オンワードパークビルディング 株式会社コングレ内
TEL 03-3510-3744 / FAX 03-3510-3748
E-mail info@jossm.or.jp URL http://jossm.or.jp